

岐阜県立関高等学校地域研究部報告

第10号

特集： 飛騨川と津保川を結ぶ

～織田政権と運材・行軍のみち～

・ 戦国・織豊期における飛騨川流域の製材と運材 森 翔吾 渡辺 俊太 岩原 知哉 佐藤 孝亮 土本 徳哉	2
・ 「東美濃三力所城」をめぐって ～山城と古文書から考える中濃の戦国史～ （再掲載） 森翔吾 渡辺俊太 岩原知哉 佐藤孝亮 土本徳哉	16
・ 船野城と津保・郡上の抗争 ～天正二年秋、郡上郡沓部をめぐって何が起きたか～ 酒向絆叶 小栗千佳 林信之介 小森渚 山根優	22
・ 郷土史でまちづくりにチャレンジ！ ～歴史マンガと足軽デリバリーで未来につなぐ～ 森 翔吾 渡辺 俊太 岩原 知哉 佐藤 孝亮 土本 徳哉	35
・ 関高校地域研究部との共同研究活動を振り返って 島田崇正（富加町郷土資料館 館長）	40
・ 部活動を振り返って 森翔吾 岩原知哉 渡辺俊太	42
・ 津保川流域の山みちについての備忘録 林 直樹	44
・ 後 記	

2026年8月25日

戦国・織豊期における飛騨川流域の製材と運材

森翔吾 渡辺俊太 岩原知哉 佐藤孝亮 土本徳哉

はじめに ～飛騨川流域の製材と運材～

永禄 10（1567）年 8 月、稲葉山城を攻略した織田信長は、同年 12 月、武儀郡関町の商人長谷川三郎兵衛に、飛騨川流域から関町までの樽之座の特権を与えた（注 1）。樽とは、皮付きの丸太もしくは加工した板材をさす（写真 1～4）。飛騨川を使って流送される丸太を陸揚げし、木挽きした上、販売する特権を与えたということである。飛騨川流域の木材産出量は、本流木曾川のそれに匹敵するほど豊富であった（注 2）。美濃制圧後、岐阜城下町の整備を急いだ信長は、三郎兵衛に命じ、飛騨川流域から岐阜に向け、陸路・河川を用いた建築材の大量輸送を行わせたと考えられる。

「楽市楽座」のイメージでとらえられがちな信長だが、製材や鍛冶などの特定業種に関しては、特権的な座の制度を認めていた（注 3）。長谷川家は、樽之座以外にも、関町代官職や加茂郡迫間の土地開発も任されている（注 4）。関町や長谷川家への厚遇とも言える政策は、岐阜城下町の整備、領内の産業振興のための一環だったと考えられる。

2019 年以降、「信長の東美濃攻略」に関する研究を進めている関高校地域研究部は、上記の知見を踏まえ、飛騨川流域の製材・運材の問題に焦点を当てた研究を行うことにした。この問題が、信長自らが朱印状を発給するほどの重大事であったことに、強い関心を抱いたからである。調査にあたっては、自治体史の検証と現地調査、レポートの作成と再検討を繰り返し行った。以下はその成果である。第 1 節では樽の伝世品、第 2 節では棟札に登場する樽、第 3・4 節では鉄製工具を扱い、製材・運材の諸問題にアプローチする。さらに第 5 節では近世の事例を参考に、戦国・織豊期の流送・陸送の実態を想定してみる。第 6 節では、長谷川三郎兵衛の末裔が取り仕切る関市春日神社の神事芸能「どうじゃこう」や、富加町加治田伊和神社の「田の神祭」について触れつつ、今後の課題を模索する。

第 1 節 樽について① ～祖師野八幡宮の床材調査～

木曾川・飛騨川合流点（美濃加茂市川合）を 40 km ほどさかのぼると、下呂市金山町にいたる。昭和初期まで運材の拠点として栄えた金山湊の所在地である（注 5、写真 5、地図）。飛騨川支流の馬瀬川をさかのぼった場所にある祖師野八幡宮に、古い板材があると聞いた我々は、許可を得て幣殿に入り調査を行った（注 6、写真 6、地図）。

幣殿の床材 8 枚には、材の長軸に向かって斜行するチョウナ痕が、はっきりと残されていた（写真 7・8）。加工痕の平均値は長さ 6 cm、横幅 2・6 cm ほどで、板材の材質・加工痕・加工法には共通性が見られる。「春日権験記絵巻」に描かれているように、立てかけた板材を片手で支え、利き手に持ったチョウナを斜めに振り下ろしながら調整した様子が目に浮かぶような資料である。（注 7、図版・復元図参照）。幣殿には、チョウナ調整の床材以外にも、台ガンナで平滑にした床材が使用されている。台ガンナ普及は近世以降であるから、こちらは元禄 8（1695）年の改築にともなう床板であろう。一方、前掲のチョウナ調整の床材は、台ガンナの普及以前、中世の所産と考えられる（注 8）。社殿造営の鎌倉期を上限、台ガンナ普及以前の織豊期を下限とする年代を想定しておきたい。いずれにしても、前掲の信長朱印状に登場する樽を彷彿とさせる貴重な資料である。

第2節 樽について② ～棟札に登場する樽～

史料を調べる中で、美濃加茂市内の2カ所の神社の棟札に「樽」が登場することを知った。以下に紹介する。甘屋白山神社は、関・加治田から神渕に向かう街道付近に所在する（注9、写真9、地図Bルート）。社殿葺き替えにともなう弘治3（1557）年棟札には、樽32をはじめ各種用材の数量が記載されている（注10、写真10）。願文中の「大小檀越」とは、領主の佐藤紀伊守忠能（大檀越、加治田城主）と、地侍の池庭彦兵衛ら（小檀越、名主層）をさすと考えられる（注11）。紀伊守は、弘治2（1556）年、斎藤道三と息子義龍の戦いで義龍に加勢し、義龍より知行を宛がわれた。紀伊守の所領は、加治田を中心に現在の富加町・美濃加茂市、および飛騨川に面した金山と下麻生、飛騨川支流の菅田と神渕に広がる（注12）。金山・下麻生は川湊であり、菅田・神渕は飛騨川から長良川水系に抜ける街道の要衝にある（写真11・12）。金山・下麻生・菅田・神渕を加治田と結べば、山あいの商業地と城下町加治田をつなぐ流送・陸送ネットワークが完成する（地図A・Bルート）。飛騨川流域の差配を任された紀伊守は、ネットワーク整備を急いだのではないだろうか。前述の甘屋白山神社棟札や、菅田須波神社の紀伊守奉納棟札は、その間の事情を物語る史料といえよう（注13、写真12）。

加治田の南方、関から飛騨への道中に位置する下蜂屋の天神神社には、天正15（1587）年の棟札が残る。願文には、可児郡金山の森家家老細野右近介が、樽木315を寄進したとの記載がある（注14、写真13）。本能寺の変後、東濃・中濃は森長可の統治下に置かれたが、長谷川家の関町支配は存続した（注15）。秀吉は、建築や造船のため、飛騨川の木材生産を重視したと言われる（注16）。315もの樽板寄進が物語る通り、長谷川家の差配の下、樽生産はいよいよ盛んとなったにちがいない。「樽」「樽木」の文字が墨書された弘治3年、天正15年のふたつの棟札。「樽之座」が登場する永禄10年信長朱印状。この三者（1557・1567・1587）をつなぐと、16世紀後半の木材活用の様相がおぼろげながら浮かびあがる。

第3節 鉄製工具について① ～生産と調達～

信長は、なぜ、樽之座の特権を関の商人に任せたのか。その背景を考えたい。

鍛冶町として知られた関は、室町期に刀剣生産のピークを迎えた。古田憲司氏は、①背景に日明貿易があったこと、②商工業者の自治都市であったこと、③鍛冶町である以前に番匠（大工）の町であったことを、種々の文献史料を駆使して明らかにした（注17）。

同時に、考古学分野でも、製鉄工房の古町遺跡（関市平和通）や、鍛冶屋敷跡の重竹遺跡（関市下有知）の調査の結果、素材の搬入・加工や在郷鍛冶の実態が、明らかになった（注18、写真14・15）。重竹遺跡では、土塁と堀で区画された室町～近世初期の鍛冶屋敷跡が見つかり、建物内から火床・焼土・木炭・鉄滓・羽口・砥石等が検出された。出土遺物には、14～17世紀初めの陶磁器、短刀・小柄・鋤・切羽・鉄鎌・槍金具・筭・火打金・鎌・鋏・釘・鋸・留め金具・鉄輪・毛抜き・鉄錘等の鉄製品が含まれていた（注19）。山樵・大工道具は出土していないが、他の鉄製品同様に、重竹の鍛冶屋敷のような在郷の工房で制作されたと考えるのが自然である。

15世紀以降、関の鍛冶集団は各地に拡散する。興味深いことに、関を離れても「関鍛冶」を名乗っている。隣接する加茂郡では「蜂屋関」（美濃加茂市蜂屋）、「小山関」（美濃加茂市小山）、「酒倉関」（坂祝町酒倉）が知られている（注20）。これに加え、富加町加治田も、鍛冶集団の集住にちなむ地名と考えられる。加茂郡の4カ所の鍛冶場のうち、小山は飛騨

川、酒倉は木曾川に面し、前掲の重竹遺跡も長良川沿いにある。いずれも、川湊を意識した立地を選んだのであろう。これに対し加治田と蜂屋は、大河川沿いから離れて位置するが、街道沿いの商業地・武家地として栄えた場所である。以上のことから、関鍛冶の加茂郡方面への拡大の背景には、岐阜・関と飛騨川流域を結ぶ運材・製材の発展や、関の商工業者の勢力拡大があったと考えたい。信長が、樽之座の差配、加茂郡迫間の土地開発を任せたのも、関町の持つ鉄製農工具の供給力を評価したからであろう。

第4節 鉄製工具について② ～工具類に関する推察～

中世の工具類に関しては、出土品・伝世品ともに資料に恵まれていない。ただし、前掲の祖師野八幡宮床材の観察からは、大鋸引きではなく、クサビとゲンノウを用いた打ち割り技法で丸太を板状に割り、表面をチョウナで整えた様子が見えてきた（注 21）。

チョウナ以外の工具としてはヤリガンナに注目したい。台ガンナ普及以前、材の整形にはチョウナとヤリガンナが使用された。関市内では、日龍峯寺多宝塔（鎌倉期）の塔内円柱に、長軸に沿って縦に走るヤリガンナ痕がはっきりと残されている（注 22、写真 16）。中濃地域のヤリガンナ出土事例としては、美濃加茂市蜂屋の尾崎遺跡出土品が挙げられる。出土状況から 8 世紀後半～11 世紀頃の遺物と推定されている（注 23）。古墳出土の小型品とは異なり刃部が大きく、絵巻物に登場するものに類似しており、日龍峯寺の柱加工に使われたヤリガンナもこれに近いと考えられる。

ヤリガンナから台ガンナへの移行期に関しては、建築遺構や絵巻物の調査から、近世初頭を想定するのが一般的である。その関連資料として、前掲の祖師野八幡宮保管の元和 3（1617）年棟札の加工痕のあり方が、非常に興味深いので紹介しておく。願文が書かれた棟札表面には、台ガンナで平滑に仕上げた痕跡が残る。これに対し、裏面にはチョウナによる荒い整形痕のみが残されていて、台ガンナ調整は省略されていた。紀年銘もあり、移行期の木材加工の実態を知り得る稀有な資料である（注 24、写真 17・18）。

チョウナ・ヤリガンナの使用例にも触れておく。調査の過程で、加治田にチョウナやヤリガンナを使用する佐藤正裕氏の家具工房があることを知った。また、部活動の過去の記録から、飛騨市の大工、荒木昌平氏の工房訪問時（2018）の写真・動画を見出した。現在の職人仕事では、材を平滑に仕上げるという本来の目的ではなく、表面に飾り模様を付ける目的で使用されているが、加工の過程、特に手さばきや刃先の動きと加工痕、材の仕上がりとの関連性を知る上で、様々なヒントを得た（注 25、写真 1・2・19・20）。建築遺構や出土品に関する実験考古学的検証は、今後の課題のひとつとしたい。

第5節 近世の事例からの類推

本流木曾川の運材は応永年間（15 世紀初前後）、支流飛騨川のそれは享禄元（1528）年にさかのぼるといえる。木曾川では幕府が、飛騨川では在地領主の三木氏が、それぞれ関わったとされる（注 26）。本節では、乏しい中世史料を補完するため、近世史料、聞き取りや踏査の知見を交え、以下、中世の運材の様子を想像したい（注 27）。

南飛騨や郡上の山々から切り出された丸太は、谷筋から本流に送られた。丸太は、せまい急流をくぐり抜けるため、「一本流し」で流送された。飛騨川と馬瀬川の合流点付近にあった金山湊はその一大拠点であった（写真 21）。急流を通過し、川幅が広く流れがゆるやかになる下麻生湊に集められた丸太は、筏に組まれ、各地の湊で船頭を換えつつ伊勢湾方面まで運ばれた（写真 22）。①濃尾平野各地の商業地の発展、②流通経路の整備、③各種技術の水準、④地理的な条件、以上①～④の観点から考え、前述の近世運材の光景は、す

でに、戦国・織豊期に現れていても何ら不思議ではないと判断する。陸送についても、近世の事例を参考に言及したい。金山・下麻生・太田等で陸揚げされた丸太は、木挽きされたのち、陸路、上有知や岐阜に運ばれた。前述の通り、金山からは放生峠を越え上之保にいたる道と、金山から袋坂峠・北条峠を越え中之保にいたる道のふたつがある（地図Cルート）。峠に車道が開通するのは明治以降であり、それ以前は、牛馬（荷駄）もしくは人（歩荷）が荷を背負って運んだ。津保川では、木材の流送や鵜飼も行われているので、板材の流送も行われたはずである（写真 23）。なお、津保川流域の C ルート開通時期は、斎藤新五が津保を知行地としたのちとするのが穏当であろう（注 28）。

下之保まで陸送された板材の一部は、さらに西に向かい上有知まで運ばれた。見坂峠を越え、口野々を経て上有知にいたる地図 D ルートである（注 29）。『飛州志』によれば、関ヶ原の戦い以前、上有知の佐藤氏が飛騨川流域の流通を掌握していたという。津保川流域を支配していた加治田の斎藤氏が衰亡したのちは、佐藤氏が津保川を統治し、同時に飛騨川からの流通ルートも掌握したと考えられる（注 30）。この間の事情は、当地に残る諸文献や棟札の内容とも整合的である（注 31）。このほかの陸路として、前述の通り、神湊から伊深・加治田に抜けるルート（地図 B ルート④⑤）、下麻生から伊深に抜けるルートがある（地図 A ルート②③）。下麻生・神湊・伊深はいずれも紀伊守の所領であるから、A・B ルートは C ルートに先行し整備されていたと考えるべきである。

A～D のルート以外にも、ルート間を結ぶ峠道が多数存在する。陸送が盛んになり、流通経路が多様化・複雑化すれば、当然、新規参入者も増加したはずである。利害衝突が頻繁に起きるのは必然であり、その間の事情や公権力介入による事態収拾の過程は、楽市制札の条文からも読みとれよう（注 32）。樽に関しても例外であるはずがなく、長谷川三郎兵衛宛朱印状発給の背景には、複雑な既得権益を一元化することにより、岐阜城下町の整備を迅速かつ円滑に進めようとした織田政権の意図があったと考えられる。以上に見た通り、飛騨川流域の製材・運材の支配権は、加治田佐藤氏（弘治 2～永禄 8 年、A・B ルート整備）、加治田斎藤氏（永禄 8～天正 10 年、C ルート整備）、上有知佐藤氏（天正 10～慶長 5 年、D ルート整備）の順に引き継がれ、さらに金森氏（慶長 5～16 年、B・C ルート一部封鎖？）を経て、長期に渡る尾張藩政期を迎えることになる。

まとめにかえて ～「どうじゃこう」と「田の神祭」～

長谷川家は、江戸期を迎えたのちも、尾張藩に下麻生湊の差配を任されていた（注 33）。制限を受けつつも、特権の一部を認められていたようである。『関市史』によれば、長谷川家の歴代当主は、関町の総鎮守春日神社で演じられる神事芸能「どうじゃこう」の主役を、現在にいたるまで務めているとある（注 34）。この芸能について調べたところ、その内容が、運材・製材の問題と深く関わりそうなので、次の研究に繋げるためにとりあげておく（以下、神事芸能の内容については注 35 の文献より引用）。

「どうじゃこう」の起源については、天文 6（1537）年以前にさかのぼることが判明している（拍子木墨書の紀年銘）。演目は、「四方浄め」「薙刀振り」「棒振り」「宝獅子」「箕獅子」「どうじゃこう」「豊年踊り」の 7 番で構成されている。1 から 5 番は魔除けや除災のための呪術的要素が強く、7 番は田楽や田遊びの系譜をひく。5・7 の境の 6 番には、芸能全体をさす呼称ともなった「どうじゃこう」と呼ばれるからくり芸が挟み込まれる。名称は、祭りの執行者が、演目中に「どうじゃこうなりけり、じざいなりけり」と囃すことに由来する。この文言を「童子夜行なりけり、自在なりけり」と解し、「夜、童子が深山に火

を放ち、魔物を退治し太平を導く」との意味に解釈する見解がある。

実際、猿面童形の木偶 2 体と小松明を載せた「お船」(木箱)を縄で操り、大松明に点火するという仕掛け(お船渡し)がこの芸能の見せ場であり(写真 24)、関以外では、静岡県浜松市水窪町(西浦の田楽)、長野県下伊那郡阿南町新野(雪祭り)にのみ残る。水窪は、天竜川支流水窪川沿いの山あい、阿南は天竜川右岸の南信・三河境に広がる高原地帯に所在する。いずれも運材・製材に深い関わりを持つ。水窪や新野の場合、2 体の木偶はそれぞれ「観音と船頭」「恵比寿と大黒」をあらわす。海上の補陀落浄土に降臨する観音、漁業・航海の神恵比寿は、ともに、船や船頭と同様、舟運や運材を連想させる。関の「お船」の側面には、波のうねりが表現されているので、水窪・阿南同様、水運と関わりとみてよい(写真 25)。童形の木偶に関しては、日月とともに船に同乗することから、護法童子に擬する見解があるが、姿かたちや囃し言葉から考え、穏当であろう。

船に乗り込み山の魔物を退治する護法童子の勇ましい姿と、山林資源の利権に食い込む関の商工業者のたくましい活躍ぶりは、我々には、まるで二重写しのように見えるのだが、いかがであろうか。「自在なりけり」の自在とは、本来、「意のまま」を意味する仏教用語であり、自在人、観自在菩薩、自在天など、初期漢訳經典にたびたび登場する。護法童子や自在天はインド在来の神に由来する仏法の守護神で、密教の普及とともに日本でも広まった。狭義には、修験者の使役する神霊をさす場合もあるという(注 36)。

神仏分離令(1868)まで、春日神社別当の大雄寺は、関町の新長谷寺の末寺であった。十一面観音を本尊とする新長谷寺は、元来、天台真言 2 宗を兼ねる特異な寺院である(注 37)。自在の掛け声、観音や護法童子の登場、闇と炎の演出など(本来夜に上演)、「どうじゃこう」に潜む濃厚な密教色は、新長谷寺に由来するのだろう。さらに想像をたくましくすれば、天竜川流域と関市にのみ残存する「船渡し」のつながりに関しても、山中を縦横に移動する修験者の介在を想定できよう(注 39)。神仏の加護の下、時流に乗った商工業者たちが「自在」を謳歌する神事芸能が「どうじゃこう」だったのではないか。

「どうじゃこう」に付随し、富加町加治田の「田の神祭」にも言及しておく。演目構成は「どうじゃこう」に近似し、元々その中に「お船渡し」が含まれていたとされる(注 38)。弘治 2(1556)年創建の龍福寺勧請開山の蘭畹玄秀が「龍福寺十境」のひとつに選んだ「村田楽」とは、この「田の神祭」をさす。関に同じく密教との関わりも深い(注 40)。加治田は宿場町・城下町であり、刀匠が在住する鍛冶町でもある。関の「どうじゃこう」、加治田の「田の神祭」、そして長谷川家をはじめとする関の商工業者の間に、強い結びつきがあったと考えた方が自然であろう。長谷川家と並ぶ関の有力商人羽瀧意休は、加治田城主佐藤紀伊守と姻戚関係にあり、早々に、信長に内応していたと言う(注 41)。政治・経済双方において、関と加治田は極めて近い存在だったのである。

以上、信長の岐阜町整備は、飛騨川流域の木材資源、関の商工業者の技術力があってこそ達成されたのであり、信長自身も、関町の自治権を損ねることはなかったという(注 42)。そのような商工業者の連帯維持のために必要だったのが、まさに神事芸能であった。春日神社では、「どうじゃこう」に加え、刀匠による神事能が幕末まで行われていた。今後は、関とその周辺の中世的要素を残す芸能を調査し、地域の中世史を再検討したい。「どうじゃこう」は毎年 4 月、「田の神祭」は 5 年に 1 度の 4 月、それぞれ執り行われている。2025 年はその 5 年に 1 度の年である。古い芸能が今も伝わる幸運に感謝しつつ、まずは両神事芸能の参観、記録、聞き取りの準備を進める予定である。

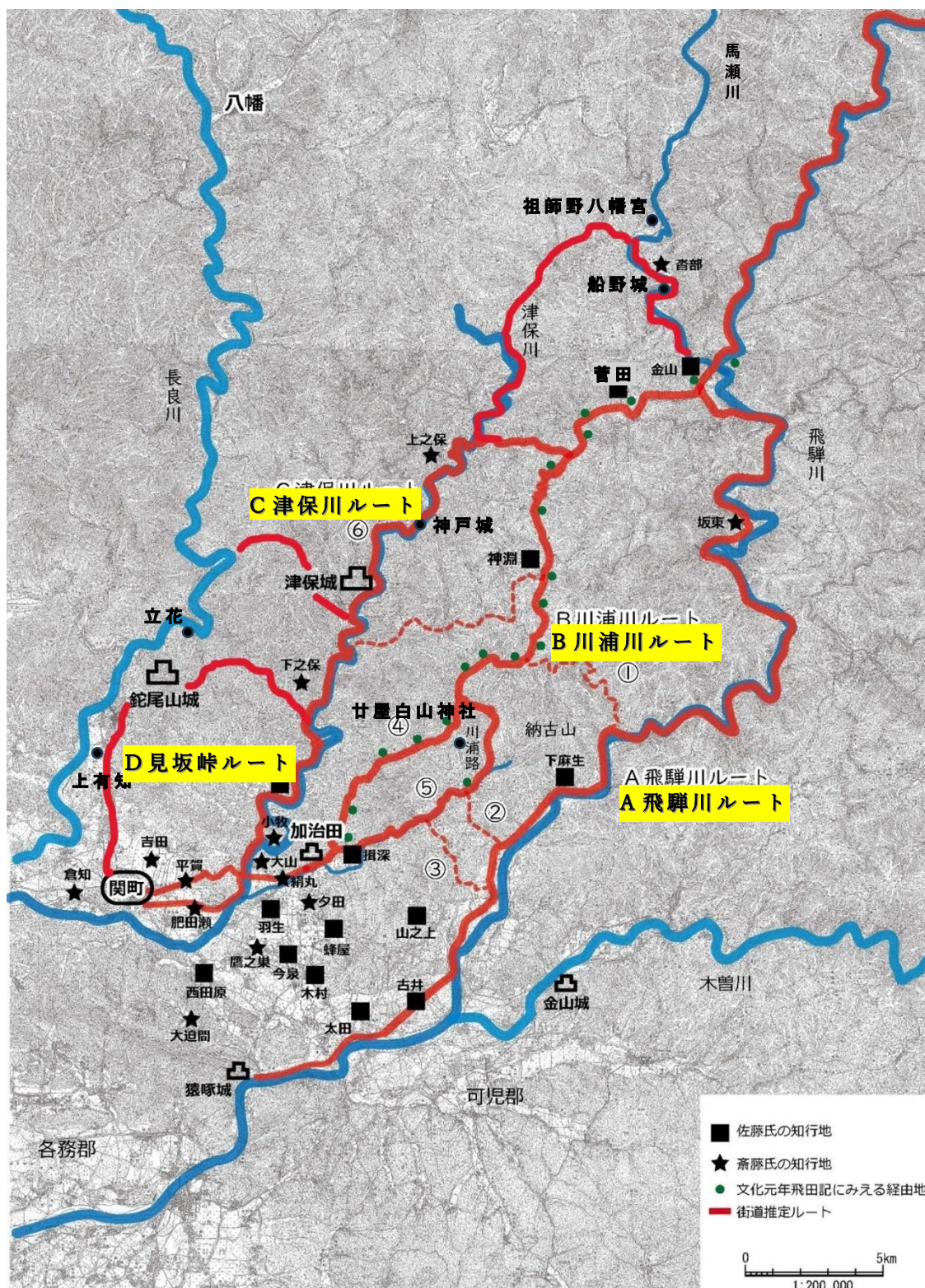


図 1 加治田城領域での交通路想定図（下図は明治 44 年大日本帝国陸地測量部測図）

【加治田領を中心とした関連地図】 関・加治田方面から飛騨川流域に向かう陸路及び水系を明示。『関高等学校地域研究部研究報告 第 9 号』掲載の島田論文より引用・加筆。①A・B（弘治 3 年～）、②C（永禄 8 年～）、③D（天正 10 年～）の順にルートが整備されたと考えられる（本文参照）。



写真1 樽板（屋根板）の製作



写真2 大鋸（近世以降に普及）の実演
※ともに荒木昌平氏の工房（飛騨市）



写真3 樽板製のひさし（上面）



写真4 樽板製のひさし（下面）
※ともに、加茂郡七宗町神湊の民家



写真5 馬瀬川(左)・飛騨川(右)合流点



写真6 板材調査の様子
写真6～8は祖師野八幡宮で撮影（下呂市）



写真7 チョウナ痕の様子



写真8 チョウナ痕の様子（拡大）



チョウナ使用の復元図

※「春日権験記絵巻」を参照に作図（作成：杉浦ひのか）



写真9 廿屋白山神社（美濃加茂市）



写真10 廿屋白山神社棟札（部分）

「津々野（廿屋）」、「弘治」の文字が確認できる
美濃加茂市民ミュージアム寄託



写真 11 下麻生湊（加茂郡川辺町）



写真 12 菅田須波神社（下呂市）



写真 13 下蜂屋天神神社（美濃加茂市）



写真 14 古町遺跡出土の砥石
関市文化財保護センター蔵



写真 15 古町遺跡出土鉄滓
総出土量は160キロに達する
関市文化財保護センター蔵

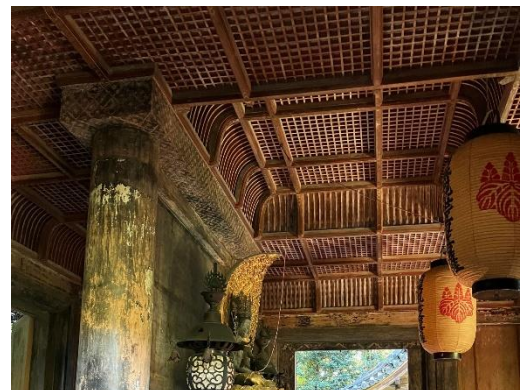


写真 16 円柱に残るヤリガンナ痕
日龍峯寺多宝塔内部（関市下之保）

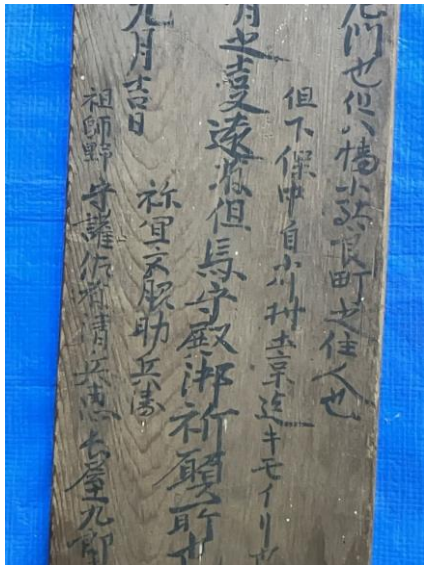


写真 17 祖師野八幡宮元和三年棟札
台ガンナで仕上げた表面



写真 18 祖師野八幡宮元和三年棟札
チョウナ痕の残る裏面



写真 19 チョウナの使用例



写真 20 ヤリガンナの使用例



写真 21 飛騨川（加茂郡七宗町付近）
幅の狭い急流が続く（現在はダムあり）



写真 22 復元された筏
美濃加茂市市民ミュージアム蔵



写真 23 津保川の貯木場付近
関市大洞の小字名：定木場



写真 24 「どうじゃこう」
「お船渡し」のからくりの実演



写真 25 「どうじゃこう」の「お船」(木箱)

「どうじゃこう」の「お船」の拡大写真。春日神社の祭礼では「木箱」と呼ぶ。木箱の中には、猿面・童形の木偶2体、小松明が乗る。索縄からくりで大松明に近づけ着火させる。木箱の側面に描かれた「波のうねり」から、木箱が船であることがわかる。

【注釈・引用文献】

（注 1）「長谷川三郎兵衛宛織田信長朱印状（永禄十年十二月）」、『関市史史料編 古代・中世・近世』（関市教育委員会 1995）ほか

（注 2）『美濃加茂市史通史編』（美濃加茂市教育委員会 1980）ほか

（注 3）『関市史通史編 自然・原始・古代・中世』（関市教育委員会 1996）

（注 4）「長谷川五郎兵衛尉宛太田一吉・一柳可遊連署書状（天正十八年九月）」、「長谷川道知宛織田信忠判物（天正六年三月）」、「長谷川道知宛織田信孝判物（天正十年）」、『関市史史料編 古代・中世・近世』（関市教育委員会 1995）ほか

（注 5）『金山町誌』（金山町教育委員会 1975）

（注 6）田口方一『東総社 祖師野八幡宮略記』（2000）

（注 7）[\[#\]春日権現験記絵巻（模本） 文化遺産オンライン \(nii.ac.jp\)](#)を参照。植村昌子氏（竹中大工道具館）のご教示。

（注 8）村上由美子氏（京都大学総合博物館）のご教示。

（注 9）前掲『美濃加茂市史通史編』（1980）

（注 10）「廿屋白山神社棟札（弘治三年三月）」、『美濃加茂市史史料編』（美濃加茂市教育委員会 1977）ほか

（注 11）地侍・有力農民層が願主となり、領主・領民の繁栄（五穀豊穰・武運長久等）を願う棟札願文の内容は、後述する「祖師野八幡宮棟札（元亀元年）」（下呂市）や「大野神社棟札（天正八年）」（関市）、「祖師野八幡宮棟札（元和三年）」（下呂市）にも共通する。祭礼を通じて結束を強めていった村落のあり方や、地侍（侍身分を獲得した有力農民層）と国衆（大名の上級家臣、地方領主）の主従関係を考える上で、見逃せない史料である。

（注 12）「桑原右近衛門尉（佐藤忠能）宛斎藤范可（義龍）知行宛行状（弘治二年十二月）」や「かち田年貢銭目録」に、下麻生、金山、桐原（菅田）、神淵の地名が登場する。『富加町史 史料編』（富加町教育委員会 1980）ほか。なお、この知行宛行状に関しては、弘治元年に発給されていたと考える見解もある（木下聡『斎藤四代』2020）。

（注 13）前掲『金山町誌』に記載がある。棟札の翻刻は明らかにされていない。

（注 14）前掲『美濃加茂市史通史編』や神社案内板に記載がある。棟札の翻刻は明らかにされていない。

（注 15）前掲『関市史通史編 自然・原始・古代・中世』

（注 16）前掲『美濃加茂市史通史編』ほか

（注 17）前掲『関市史通史編 自然・原始・古代・中世』

（注 18）古町遺跡に関しては、『関市遺跡発掘情報』（関市文化財保護センター2019）、「古町遺跡現地説明会資料」（関市文化財保護センター 2018）を参照。重竹遺跡に関しては、『重竹遺跡Ⅰ』（関市教育委員会 1979）に詳しい。

（注 19）上記（注 17）のほか、『関市史考古・文化財編』（関市教育委員会 1994）を参照。

（注 20）重竹遺跡の付近に「兼定」という小字名が残されていることから、前掲『関市史通史編』では「和泉守兼定」の屋敷に擬する見解が紹介されている。重竹遺跡で明らかになった在郷鍛冶の実態は、加茂郡内の関鍛冶集団のあり方考える上で示唆的である。な

お、加茂郡の関鍛冶の所在地に関しては明らかにされていないが、本校社会研究部（地域研究部の前身）が、蜂屋地内で鉄滓や砥石を採集したとの記録が残されている（神保朔郎『蜂屋の歴史』1978）。

（注 21）金出ミチル「重要文化財吉川八幡宮本殿に見られる打ち割りによる製材技法について」『建築史学第 32 号』（1999）、安森弘昌「へぎ板にみる木質と木工技術の関係性」『神戸芸術工科大学紀要 芸術 工学』（2019）ほかを参照。

（注 22）日龍峯寺多宝塔で目視により確認。

（注 23）『尾崎遺跡発掘調査報告書』（美濃加茂市教育委員会 2002）

（注 24）2024 年 5 月 11 日、祖師野八幡宮の許可を得て調査を行った際に確認した。なお、古建築に詳しい大工の荒木昌平氏（樹杜屋あらべえ代表）によれば、棟札裏面に残るチョウナ痕には、江戸初期・中期の手仕事の特徴が残されているとのことである。

（注 25）前掲の荒木昌平氏、半布里工房代表の佐藤正裕氏のご協力による。

（注 26）長谷川忠崇『飛州志』（延享年間）に記載が見られる。前掲『金山町誌』、前掲『美濃加茂市史通史編』、『七宗町史通史編』（七宗町教育委員会 1995）ほか。

（注 27）運材に関しては、前掲『金山町誌』、『美濃加茂市史通史編』、『七宗町史通史編』、および『川辺町史通史編』（川辺町教育委員会 1996）を参照にした。

（注 28）材木の陸送に関しては、（注 26）の自治体史に加え、『富之保村誌』（富之保村 1925）、『上之保村誌』（上之保村 1938）などの戦前の記録、平成初年の聞き書きをまとめた『武儀の語り草 第 4 集』1992 が参考となる。佐藤忠能に代わって加治田領を治めた斎藤新五に関しては、「斎藤新五宛織田信長知行宛行状（永禄八年十一月）」（前掲『富加町史史料編』ほか）によりその様相が捉えられる。忠能の時代にはなかった津保川流域や平賀・肥田瀬・吉田・倉知など、飛騨川流域と関町を結ぶルート上に新知行が与えられているがわかる。

（注 29）前掲『金山町誌』、および『美濃市史 通史編』（美濃市教育委員会 1979）ほか。佐藤氏改易後（1615）、上有知と飛騨川流域の流通経路を支配した金森氏が、間見峠（神渕・三和間）と氷坂（下之保・関町間）を封鎖し、関町に商品が流れ込まないようにした逸話は有名である（『上有知旧事記』、『美濃市史 史料編』（美濃市教育委員会 1979）所収）。

（注 30）前掲（注 26）の文献を参照。

（注 31）「佐藤金森由緒書」（前掲『美濃市史 史料編』1979）によれば、佐藤氏の支配領域は小野・西神野・志津野、すなわち津保川流域にまで及んでいたという。志津野の吉祥寺（臨済宗）には佐藤氏の位牌も保管されているので、津保川右岸の一部に佐藤氏の支配が及んでいたのは確実であろう。さらにその対岸（津保川左岸）の集落、上大野に所在する大野神社は、近隣の集落（小野・西神野・神野・大野・志津野）のみならず、上有知の鎮守も兼ねていた。このことから佐藤氏の津保川流域への影響力浸透が読みとれよう。

（注 32）たとえば、「市平賀制札写（永禄十一年）」（前掲『関市史通史編 自然・原始・古代・中世』）には、他所から移ってきた者は反対や苦情を申し出ないこと、債務者に対する不法な取り立てや差し押さえを認めないこと、違反者は速やかに処罰することなどが、明記されている。以上の条文からは、商業発展にともなうトラブルの増発や公権力の関与がうかがえよう。このような、中世後期の市場と領主権力との関わりについては、すでに『岐阜市史 通史編 原始・古代・中世』（1979）や『岐阜県の歴史』（2012）などで言及されている通り、様々な議論が重ねられているが、実態には不明な点が多い。とはいえ、岐阜町

に3カ所（美園・岩倉・中河原）、上有知領に2カ所（古市場）、加治田領に2カ所（津保・市平賀）、楽市の所在が確認されているし（『関高等学校地域研究部研究報告 第9号』2024）、楽市とは断定できないが、加治田領内に位置する商業地の中では、金山の飛驒街道沿いに上市場・下市場・万場の地名が（前掲『金山町誌』）、神湊の飛驒街道沿いに万場・下市場の地名が（前掲『七宗町史通史編』）、富加町高畑地内には市場裏の地名が（前掲『加治田町史通史編』）、それぞれ残されている。いずれも街道や河川に近い交通の要衝であり、古寺社の近くに位置する。流通経路の問題とあわせて今後の課題としたい。

（注33）前掲『川辺町史通史編』

（注34）『関市史民俗編』（関市教育委員会1996）の記載。「どうじゃこう」成立時（16世紀初頭前後か）より、長谷川家が主役として仕切っていたかどうかは不明であるが、戦国期には樽之座座方・関町代官であり、江戸期にも関町庄屋を務めていたことを考えると、全時期を通じて、深いかかわりがあったと考えるべきであろう。

（注35）「どうじゃこう」に関しては、前掲『関市史民俗編』に加え、清水昭男「関祭り頭屋祭りと「童子やこう」芸」『岐阜県の祭りから』（1996）、西岡陽子「美濃における三信遠系の田遊び「どうじゃこう」を中心に」『民俗芸能研究第53号』（2012）に詳しい。

（注36）佐和隆研、高井隆秀著、田村隆照編『密教事典』（1975）

（注37）前掲『関市史通史編 自然・原始・古代・中世』

（注38）前掲清水論文「関祭り 頭屋祭りと「童子やこう」芸」『岐阜県の祭りから』

（注39）天竜川流域と関市にのみ残る「お船渡し」に関しては、前者から後者への伝播を想定する見解が強いようである（たとえば前掲清水論文）。ただ、両者のつながりを示す歴史的資料の存在は確認されていない。我々の推論通り、「お船渡し」の成立に密教が深く関わるのであれば、修験者こそ、情報・文化の伝達者としてふさわしいと考える。時代こそ違いうが、同じ中濃地域の那比新宮神社所蔵の大般若経奥書（1333）には、楠木正成の築城、護良親王に関する伝聞が書き留められている（『岐阜県の歴史散歩』2006）。峠道・尾根道を自在に移動する修験者の活動は、林産業とも親和性が高いと思う。修験道、神事芸能、林産業の関りについては、今後の課題としたい。

（注40）前掲『富加町史通史編』に記載。加治田に所在する白華山清水寺は、江戸中期に臨済宗妙心寺派に改宗する前まで真言宗に属していた。本尊十一面観音像は平安中期作の坐像であり、関市の新長谷寺に同じく、修験道及び観音霊場の道場としての性格を有する。

（注41）前掲『関市史通史編 自然・原始・古代・中世』

（注42）同上

【お世話になった方々】

島田崇正氏・山内正明氏（富加町教育委員会） 森島一貴氏（関市文化課）
植村昌子氏（竹中大工道具館） 村上由美子氏（京都大学総合博物館）
北村隆幸氏（NPO 法人ぶうめらん） 舘弘士氏（岐山高等学校）
富加町教育委員会 半布里文化遺産活用協議会 関市文化財保護センター
美濃加茂市民ミュージアム 天正寺 龍福寺 祖師野八幡宮 郡上高等学校
株式会社パレオ・ラボ SeaLandSky EARTHSHIP 半布里工房 樹杜屋あらべえ

「東美濃三カ所城」をめぐる

～山城と古文書から考える中濃の戦国史～（再掲載）

森翔吾 渡辺俊太 岩原知哉 佐藤孝亮 土本徳哉

はじめに 天下布武をめざす織田信長は、元亀年間（1570～73）、近江・畿内を転戦し、朝倉や浅井、延暦寺、本願寺などの敵対勢力と戦い続けた。

ともに戦った斎藤新五や佐藤方秀は、馬廻衆すなわち信長・信忠父子の親衛隊であり、同時に、東美濃と呼ばれた中濃地方を統治する国衆でもあった。これに対し、東美濃の北方に位置する郡上の国衆遠藤慶隆は、表向きは織田に臣従しながらも、武田や朝倉、浅井、本願寺と内通していた。郡上の地は、家臣・領民ともに一向宗門徒が多く、慶隆も一定の配慮をせざるを得なかったのであろう（注1）。

我々は、郷土の戦国武将である斎藤新五（加茂郡加治田城主）、佐藤方秀・方政父子（武儀郡上有知城主）、遠藤慶隆（郡上郡郡上城主）の動向に注目し、織田から豊臣、徳川へと天下の情勢がめまぐるしく変動する中、地域を率いた国衆やその一門が、生き残りを賭けてたちまわる様を、まずは文献から追った。同時に、遺跡や寺社、古道等の踏査をもとに、地域社会の変容についても考えてみた。

1 天下布武と新五、方秀

（1）祖師野八幡宮棟札の調査より（右写真） 斎藤新五の所領をめぐる歩く中で、下呂市金山町に所在する祖師野八幡宮の元亀元年棟札の存在を知った。飛騨の最南端に位置付けられる金山町は、飛騨国益田郡、美濃国武儀郡・郡上郡・加茂郡の4郡の交わる地域であり、その歴史は多様で複雑である。祖師野八幡宮の所在する東地区は郡上郡に属し、永禄8（1565）年までは遠藤家の所領であったものが、信長の指示により加治田領に編入されたようである。郡上側からすれば「因縁の地」であり、後述するがこれが禍根を残すことになった（注2）。



さて、この棟札には、地頭・代官の武運長久や、国王の安穩を願う文言が書かれている（注3）。地頭は領主の新五のこと、代官は沙汰人（地侍の代表）の田口氏のことをさすと考えられる。前述の通り、元亀元年、信長は、新五や方秀とともに、朝倉・浅井・延暦寺と、近江を舞台に激しい戦いを続けていた。敵の抵抗に手を焼いた信長は、幕府や朝廷に斡旋を願い出て、ようやく和議にこぎつけた。棟札の日付は12月吉日。正親町天皇の綸旨発給は12月9日、和睦は12月13日のことであった。天長地久・国王安穩は、朝廷・幕府の安寧、天下布武の実現を願う文言であると考えられる。今回の棟札調査によって、国衆の領内統治の一端を知ることができた。また、畿内・近江をめぐる政治情勢が、棟札の願文にもあらわれていることに新鮮な驚きを感じた。

（2）織田家の危機と東美濃三カ所城 元亀3（1572）年10月、武田信玄は、信長との盟約を一方的に破棄し、遠江・三河・東濃への侵入を開始した。浅井・朝倉や一向一揆に加え、背後から信玄の襲撃を受けた信長は、絶体絶命の危機を迎えた（元亀争乱）。

この頃、郡上の遠藤慶隆は、信長に臣従しつつ信玄をはじめとする反信長勢力と内通していた。慶隆が武田・朝倉に味方した場合、織田は北方に強大な敵を抱えることになる。事態を恐れた信長は、新五や方秀に慶隆を厳しく監視するよう命じたと考えられる。馬廻衆は、攻めの要であると同時に守りの要でもあった。

新五や方秀は、敵にとって厄介な存在であった。その間の事情を伝える史料が、越中勝興寺宛・浅井長政書状である（注 4）。長政は書状の中で、「加治田、津保、鉾尾山、東美濃三カ所城が、信長を裏切り、信玄に内通した」と書き記している。三カ所城は、いずれも新五や方秀の城である。彼らが信長を裏切った形跡はなく、その後も主君に従い戦い続けた。長政書状は、信長陣営を分断し、反信長陣営の結束を固めるための虚報であったとみなしたい（注 5）。



（３）東美濃三カ所城に関わる山城と城下町の踏査 東美濃三カ所城がどのような立地にあり、いかなる構造を有していたのか。確認のための調査を行った。

新五の拠点（根城）、加治田城は、曲輪、虎口、堅堀などの施設で固めた堅固な山城である。城下の 2 カ所の城館のうち、西城館の土塁は残りがよく、高さ 2m 以上の土盛りが長さ 100m ほど、その姿を残している。東城館は、高さ約 2m の高台に位置する。『信長公記』には、堂洞合戦勝利の晩、信長自らが城館を訪れ、酒宴を催し宿泊したとの記載がある。興味深いことに、山城や城館の立地は、『信長公記』や江戸期の古地図の記載とほぼ一致する（注 6）。

加治田の出城、津保城は、河川合流点、街道分岐点にある交通の要衝で、郡上街道側に堅堀が 5 本も築かれている（津保城石垣の測量、上写真）。慶隆への警戒を怠らなかった証拠であろう。津保城主でもあった新五は、天正 6（1578）年、信長の命を受け、飛騨街道を北上し越中で上杉勢を破る。津保城は軍事拠点の役割を十分果たしたと言える（注 7）。

長良川沿いにある鉾尾山城は、峻険な山に築かれた堅固な城である。佐藤氏 3 代の城下町は川べりの低地にあり、丘陵上には、城館や市場、武家屋敷、町屋敷が次々と築かれた。岐阜城まで船で 3 時間という立地を生かし、上有知の開発に成功したといえる（注 8）。

（４）遠藤慶隆の謀反とその後 天正元（元亀 4、1573）年 4 月の信玄死去に伴い、勢いを得た信長は浅井・朝倉を次々と滅ぼしたが、早くも翌年、ふたたび危機を迎えた。武田家を継いだ勝頼が、遠江や東濃に侵攻し、本願寺や伊勢長島一向一揆とともに、信長を挟み撃ちにする作戦を開始したのである。

この企てに加わった慶隆は、信長が、新五や方秀を率いて、伊勢長島一向一揆鎮圧のために出陣した隙を突き、加治田領の神戸城（関市上之保）、船野城（下呂市金山町）を襲撃した（船野城の堀切、右写真）。この間の事情は、一次史料や『信長公記』に記載がないが、郡上藩家伝（『遠藤記』『慶隆御一世聞書』）に、寄手の武将の名や攻め口など、具体的な記述が残されている（注 9）。郡上勢は、神戸城、船野城を相次いで占領したが、その後、伊勢長島一向一揆が、織田の攻撃で全滅する

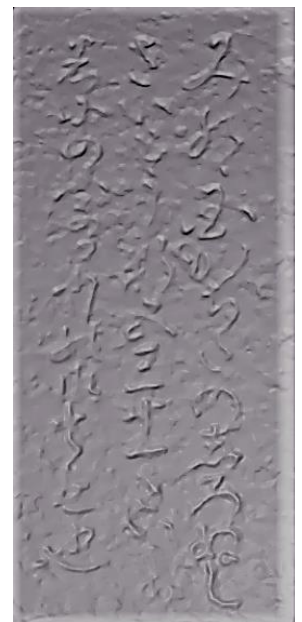


と、形勢不利とみて攻撃を中止したようである。郡上藩重臣の家伝『粥川由緒書』によれば、慶隆は、信長の激しい怒りを買ったものの、捨て身の謝罪が受け入れられたようである。領地削減などの厳罰が下された形跡はない（注 10）。翌年 5 月の長篠の戦いに参陣した慶隆は、鳶ノ巣山占領で大いに活躍し、さらに 7 月の越前攻めでは凄惨な一向宗殲滅戦に参加している。伊勢長島の全滅を機に、武田や本願寺と手を切り、信長に忠誠を誓ったと考えられる。

（５）本能寺の変と三カ所城のその後 天正 10(1582)年 3 月、信長は勝頼を滅ぼしたが、3 か月後、明智光秀の謀反により自身も本能寺で滅ぼされた。この時、信忠の下にいた新五も討死している。京都阿弥陀寺にある新五の墓石には、無念の想いを語るかのように「美濃国加治田の城主、斎藤新五三十一歳、岐阜信長父子の御供なり」（注 11）と刻まれている（**新五墓石の 3D 撮影ソリッド画像、右**）。

その後、加治田城は廃城となったが、まちは江戸期以降も商業地として繁栄した。新五の墓石は、その形態から見て江戸前期の所産と考えられる。江戸期になっても、加治田では新五が軍記や伝承に登場する。墓の施主も、新五を慕った加治田の人々であったかも知れない。

新五の支配地では、楽市や土地開発、木材資源開発などの産業振興が盛んであった。永禄 10(1567)年 12 月、信長は、関の商人長谷川三郎兵衛に、飛騨川から関にかけての木材加工・販売の特権を与えた（注 12）。この年、信長は稲葉山城を占領し、城下町や居館の整備に着手した。文書や棟札からは、飛騨川から陸揚げされた木材が、各地の川湊付近で建築材に加工され、盛んに活用された経緯がうかがわれる。飛騨川流域から岐阜城下に、大量の建築材が運び込まれたのであろう。美濃加茂の中心地、太田は、江戸期以降、中山道の宿場、木曾川水運の拠点として栄えた。上有知に同じく、すでに戦国期、繁栄の基礎が築かれていたと考えられる。



2 豊臣政権と上有知の繁栄、遠藤氏の郡上追放

方秀の子、方政は、上有知の整備に尽力した。低地から小倉山に拠点を移し、付近に町屋敷を設け、北方の曾代、南方の段、東方の口野々に武家屋敷を置いた。商業振興を図ると同時に守りを固めたのかもしれない（注 13）。

江戸期以降、上有知は美濃国屈指の商業地として繁栄した。小倉山城や上有知と言え、江戸初期の金森氏統治のイメージと重なるが、その基礎は、すでに方秀・方政の時代にできたといっても過言ではない（注 14）。

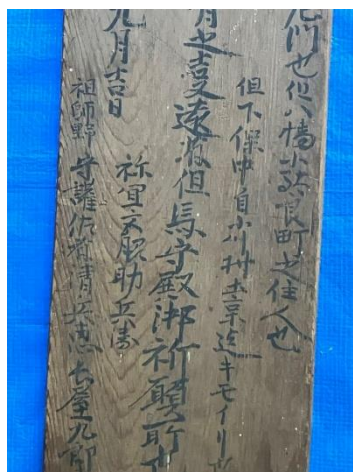
慶隆は、本能寺の変直後、織田信孝・柴田勝家に味方したため秀吉側に攻められ、美濃立花に籠城したが孤立無援のなか降伏した（**立花山、上写真**）。一旦は許されたが、秀吉の怒りは解けず郡上から追放された。のち美濃白川に領地を与えられた（注 15）。

3 関ヶ原の戦いと遠藤氏復権 関ヶ原の戦いで、西軍についた方政は改易処分となった。その後、関ヶ原直後に自決したとも（地域の伝承）、大坂の陣で戦死したとも伝えられる（『佐藤金森由緒書』）。佐藤家家臣の中には、新領主金森家に仕えた者もいた。地元には、



今も家系図や位牌（関市志津野吉祥寺）が大切に保管されている。大名としての佐藤氏は滅んだが、上有知の繁栄の基礎を築いた功績は大きい。

慶隆ほど、浮き沈みの多い武将は、珍しいのではないか。くわえて、3代将軍家光に仕えたほど長寿であった。八幡城下町発展に尽くし、郡上繁栄の基礎を築いた人物と言えよう。



左写真は、今回の祖師野八幡宮の調査で確認した未発表資料、元和三年棟札である。遠藤但馬守殿（慶隆）の祈願所と明記されており、郡上を奪回した喜びが伝わってくるかのようなのである。

まとめとして 信長・信忠親子の本陣を守り、戦場で戦った馬廻衆は、同時に、地域とともに生きた国衆でもあった。動乱の時代に生きた美濃の国衆やその一門は、波乱の生涯を送っている。

新五は本能寺で討死。方政は関ヶ原で改易。慶隆は郡上追放に遭い、のち郡上を奪還。今回、地元の武将の生き様を追ってみて、それぞれの運命に驚きつつも、一方で、中世の人々が、後世に残した数々の遺産の素晴らしさに気づいた。城や城下町のような史跡、和紙や刀剣、木工のような産業など、いたるところでその足跡を見出すことができる。



交通網整備も彼らの功績である。川筋や大きな街道はもちろん、産業や生活の著しく変化する中、忘れ去られようとしている尾根道や峠道の中には、中世にさかのぼるものも多いはずである（美濃市上河和から関市富之保に向かう峠道の踏査、上写真）。

今回の調査で、我々は、未発表資料や一般に知られていない資料に出会った。写真はその一例、関市下之保天正寺の開山、燈外宗晋の頂相彫刻である（頂相彫刻の調査、下写真）。



燈外は、飛騨安国寺在職中、武田の兵火で伽藍を焼かれる苦難に遭ったのち、天正元年、天正寺開山となった人物と伝えられる（注16）。当時の下之保の領主は新五であった。

天正寺の寺名や、燈外が飛騨の事情に通じていることなどから考え、越中攻略を企てた信長の意向により、この地に建立されたのではないかと我々は想像する。現在、天正寺の協力の下、頂相彫刻の科学分析を進めているところである。

謎解きが進むと、新たな謎（課題）に直面する。

今、我々の関心は、中世の美濃国において、武家と深いつながりをもった神社や寺院の歴史に向かいつつある。今後も地域の方々と協力し、地道に郷土史研究を続けていきたい。

【参考文献】

- ・『岐阜県立関高等学校地域研究部報告 第3号』（2020.6）
- ・『岐阜県立関高等学校地域研究部報告 第4号』（2021.3）
- ・『岐阜県立関高等学校地域研究部報告 第7号』（2023.3）
- ・『岐阜県立関高等学校地域研究部報告 第9号』（2024.4）
- ・『岐阜の山城ベスト 50 を歩く』（2010）
- ・池上裕子『織田信長』（2012）
- ・金子拓『織田信長〈天下人〉の実像』（2014）
- ・鴨川達夫「武田信玄の西上作戦を研究する」『東京大学史料編纂所紀要 25』（2015）
- ・小笠原春香「武田・織田間の抗争と東美濃—元亀・天正年間を笠原中心に—」『武田氏研究』53（2016）
- ・『現代語訳 信長公記』（2017）
- ・『東海の名城を歩く 岐阜編』（2019）
- ・木下聡著『斎藤氏四代』（2020）
- ・金子拓『裏切られ信長 不器用過ぎた天下人』（2022）
- ・『郷土の偉人マンガ斎藤新五利治』（2023）
- ・『郡上郡史』（1922）
- ・『富之保村誌』（1925）
- ・『上之保村誌』（1937）
- ・『郡上八幡町史 通史編上』（1960）
- ・『郡上八幡町史 史料編 1』（1985）
- ・『金山町誌』（1975）
- ・『美濃市史 通史編』（1979）
- ・『美濃市史 史料編』（1979）
- ・『富加町史 史料編』（1980）
- ・『富加町史 通史編』（1980）
- ・『武儀町史』（1992）
- ・『関市史史料編 古代・中世・近世』（1995）
- ・『国府町史 通史編 1』（2011）
- ・江戸期の地誌（『新撰美濃志』『濃州徇行記』『濃陽志略』『美濃明細記』）

【引用文献】

- （注 1）『郡上八幡町史 上』（1960）
- （注 2）『金山町誌』（金山町教育委員会 1975）
- （注 3）「祖師野八幡宮棟札」（元亀元年十二月）、（注 2）に掲載。
- （注 4）「越中勝興寺宛・浅井長政書状」（元亀四年二月）

[\[#\] 【浅井長政書状】（目録）\(adeac.jp\)](#)

（注 5）書状の文言通り、「三カ所城」すなわち馬廻衆が、武田方に内応したと考える論考が少なからずあるが（池上裕子『織田信長』2012）、史実にはそぐわない見解である。

（注 6）～（注 8）『岐阜の山城ベスト 50 を歩く』（2010）、『東海の名城を歩く 岐阜編』（2019）を参照。

(注 9)『郡上八幡町史 通史編上』(1960)、『郡上八幡町史 史料編 1』(1985)を参照。船野城の遺構は下呂市金山町船野に現存する。郡上藩家伝には、「津保・梶田(加治田)城主斎藤新五郎(新五)襲来」「郡上郡沓部郷船野城」と書かれていることから、『郡上郡史』以下の自治体史では、この出来事を加治田勢による郡上侵略ととらえているが、ちょうどこの時期、斎藤新五は信長に同行して伊勢長島一向一揆の鎮圧に乗り出しているの、郡上勢はその隙を狙って船野城奪回を試みたのではないだろうか。

(注 10)『粥川由緒書』は『郡上郡史』(1922)に引用されている。『粥川由緒書』には、「信長は、慶隆が信玄に同心したことを譴責したが一喝して許した」とあるが、それが正しいとするならば、信長による譴責は、信玄の死去によって西上作戦及び信長挟撃作戦が挫折した元亀 4 年 4 月以降のこととなろうが、それを裏付ける史料は確認されていない。むしろ天正 2 年の伊勢長島一向一揆の際、加治田勢と事を構えた出来事をさすと考えべきと、我々は推察する。

(注 11)『郷土の偉人マンガ斎藤新五利治』(2023)の巻末解説を参照。

(注 12)「長谷川三郎兵衛宛織田信長朱印状」(永禄十年十二月)、『関市史史料編 古代・中世・近世』(1995)に掲載。

(注 13)『岐阜の山城ベスト 50 を歩く』(2010)、『東海の名城を歩く 岐阜編』(2019)

(注 14)水運を重視した佐藤家初代清信は、城下町(古町)を低位段丘に形成したが、やはり水害がひどかったのか、3 代の領主はいずれも丘陵上の古市場(清信)、以安寺山(方秀)、小倉山(方政)に屋敷を構えている。

(注 15)『郡上八幡町史 通史編上』(1960)、『美濃市史 通史編』(1979)

(注 16)『国府町史 通史編 1』(2011)

【お世話になった方々、団体】

島田崇正氏・山内正明氏(富加町教育委員会) 森島一貴氏(関市文化課)

祖師野八幡宮 天正寺 龍福寺 半布里文化遺産活用協議会 関市文化財保護センター

岐阜県立郡上高等学校 株式会社パレオ・ラボ SeaLandSky EARTHSHIP

船野城と津保・郡上の抗争

～天正二年秋、郡上郡沓部をめぐって何が起きたか～

酒向絆叶 小栗千佳 林信之介 小森渚 山根優

はじめに

船野城は、岐阜県下呂市金山町に所在する戦国期の山城である。馬瀬川沿いの船野山山頂付近に築かれた城で、小規模だが堅固な構えをもつ（図版1・2）。

郡上藩遠藤家家伝（以下、家伝と略）によると、天正2（1574）年、この城をめぐって郡上領主遠藤慶隆と加治田領主斎藤新五の軍勢が戦ったという。慶隆（1550-1632）は、織田信長に臣従しつつも反織田勢力と二重外交を行った武将として知られる。乱世を生き抜き、83歳の天寿を全うした。一方の新五（1551-1580）は、織田家の馬廻衆を務めた武将で、軍功により、加茂郡加治田・武儀郡津保を与えられふたつの城と城下町を有した。津保は郡上と境を接していたため、郡上側から「津保領主」と認識されていたようである。在地領主の慶隆に対し、馬廻衆の新五は、信長・信忠父子とともに畿内近国を転戦することが多かった。本能寺の変では信忠に殉じ、二条御所において31歳で討死した。

ともに信長配下であり、隣り合う領主でもあった慶隆と新五が、なぜ戦うことになったのか。郷土の武将の動向に関心を持った我々は、合戦に関し、文献、伝承、山城、地理環境等の調査を進めることにした。その過程で、当時の地域の諸問題や国内情勢が合戦の原因となったと結論付けた。以下に調査の概要と考察を述べてい。

（1）家伝の記載内容

郡上藩には『遠藤記』『慶隆御一世聞書』『秘聞郡上古日記』『東家遠藤家記録』等の家伝（江戸期、同系統）が残されている（注1、添付資料・史料参照）。船野城の戦い

（以下船野合戦）に関しては、おおむね以下の内容が伝えられている。

- ①天正2年、郡上に野心を抱いた津保・加治田領主斎藤新五が郡上に侵攻した。
- ②これに対し遠藤分家（木越）が、神戸山に立て籠もる斎藤方を討ち取った。
- ③田口・蟹沢両氏に率いられた斎藤勢が、郡上郡沓部村の船野山に立て籠もった。
- ④これに対し、遠藤本家（八幡）が船野山に討伐隊を送った。
- ⑤急峻な船野山攻略のため、竹梯子を多数用意し夜襲をかけた。
- ⑥粥川甚右衛門の手勢が崖を駆け上って侵入し、敵将のひとり蟹沢氏を討ち取った。
- ⑦遠藤作右衛門の手勢が別方向から攻め、敵将のひとり田口氏を討ち取った。
- ⑧沓部村は、主将の粥川甚右衛門に恩賞として与えられた。

家伝からは新五の侵略に対し、二手に分かれた郡上勢が2カ所の城（神戸・船野）を次々と襲い、敵将を討ち取り、沓部奪回に成功した様子がうかがえる（注2）。

（2）現地踏査と文献調査から合戦の経過を探る

以下、船野城の現状を報告する。城の遺構は、飛騨川支流馬瀬川の蛇行点に向けて突き出た船野山の山頂付近（標高402m）に所在する（注3）。東西に延びる尾根上に主郭となる曲輪があり、その西側下段に曲輪、2つの曲輪をめぐる切岸の直下に帯曲輪、東側に堀切・土塁が残る。西側曲輪の西端及び南側には虎口がみられる（図版3、写真1・2）。主郭は20×14m程度、不定形な西側曲輪は12×12m程度の規模を有する。切岸直下の帯

曲輪の内側には、本来、小規模な堀がめぐっていたという（注4）。堀の一部は今も西北に残るが大部分は土砂に埋もれている。東側の堀切の斜長は5 mほどで、堀切の外側には、掘削土を盛り上げた土塁があり、この地点から西端の帯曲輪付近までの総延長は50 m近い。東西の尾根道は比較的なだらかで、尾根をはさむ斜面は陰しく攻めがたい。西側に虎口、東側に土塁と堀切を設けたのは、尾根伝いの敵襲を想定してのことであろう。

家伝には、多数の竹梯子を用意した郡上勢が夜襲に成功したとある。郡上勢は、竹梯子を利用して南北どちらかの斜面から襲撃したと考えられる。馬瀬川を使えば、郡上郡和良から船野城付近まで舟で梯子を運ぶことも可能である。川から近い北側斜面から攻めたのではないだろうか。また、地元の伝承によれば、郡上勢は、密かに通じた下沓部（馬瀬川左岸の集落）の庄屋を道案内にし、西側の尾根筋から攻め寄せたという（注5）。

家伝の記載、地元の伝承、山城の立地や遺構の在り方を総合的に検討した結果、「まずは北側斜面から竹梯子を使って駆け上がってきた一隊（粥川甚右衛門勢）が奇襲により城内を攪乱し、その隙を突いて、西側尾根筋からやってきた一隊（遠藤作衛門勢）が第二波の攻撃を行ったのではないかと、我々はイメージした（図版4）。推論ではあるが、今後の検討材料として、我々の思考過程を書きとめておく。

文献を読み、現地を歩き、地元の方々の話を聞くと、まるで合戦の状況が眼前に浮かんでくるように思えた。やはり現地踏査は欠かせないものだと、改めて感じた。

（3）神戸山はどこか

船野城に関しては、家伝のほか『新撰美濃志』にも記載があり（注6）、城や合戦に関わる伝承が複数残されている（注7）。船野城の位置は確定的である。

では、神戸山はどこにあったのか（注8）。船野山に関しては郡上郡沓部村と家伝に地名が明記されているが、神戸山に関しては地名の記載がない。島田崇正氏（富加町教育委員会）から、津保城の北7キロほどの地点（関市上之保）に神戸の地名が残されていると聞き、現地を訪れてみた。神戸は津保川右岸の集落で、背後に切り立った山（標高406 m、神戸山）がそびえたつ（図版5、写真3）。登山路がはっきりしないため、いまだ踏査を行っていないが、立地や外観、赤色立体地図の地形情報（尾根沿いの平坦面等）から、津保から船野に向かう街道沿いのこの山こそ、神戸城の所在地であると判断した。

郡上勢の狙いは、神戸城占拠による津保・船野間の連絡路遮断と、孤立した船野城の占拠にあったにちがいない。

（4）合戦の背景を地域の視点から探る

次に我々は、家伝と他の史料を比較し、合戦の経過を検証することにした。結果、合戦の背景に、地域の諸問題と国内情勢、ふたつの事情があることがみえてきた。

まずは地域の諸問題について触れる。永禄8（1565）年11月、東美濃を攻略した信長は、武儀郡の津保川流域、及び郡上郡沓部村を新五にあてがった（注9）。沓部は本来、慶隆の所領であったが、信長はこれを取り上げ新五の知行とした。新五は信長父子の馬廻衆であったから、沓部は織田直轄領となったということになる。沓部から放生峠を越えて津保にいたるルートは、飛騨と岐阜城を結ぶ最短ルートである。広大な城下町と堅固な山城を有する津保は、そのルート上の要衝であった。岐阜城下町の整備を急ぐ信長は、木材資源確保のため、新五を通じ、流通ルートの直接掌握を狙ったと思われる（注10）。

一方、慶隆にとって、沓部は木曾川水系への唯一の出口であった。木材や薪炭など豊富な森林資源を搬出する利権は、相当なものだったと思われる（注11）。要地と利権を

奪われた慶隆が不満を抱くのは当然である。慶隆が、信長に臣従しつつも、朝倉、浅井、本願寺、武田と連絡を取り合っていたことに関しては複数の指摘がある（注12）。二重外交を展開しながら、沓部奪回の機会を狙っていたのかもしれない。このような状況下、信長は、馬廻衆の新五や佐藤方秀に対し郡上監視を命じたと考えられる（注13）。郡上を包囲するかのような津保城やその出城（神戸・船野）、加治田城、鉾尾山城、関城等、織田方の山城群の配置や遺構の在り方は、その証拠であろう（注14）。実際、織田領北辺の山城群は、反織田勢力にとって邪魔な存在であり、信玄や長政も警戒を怠っていなかった（注15）。

天正6（1578）年、信長の命を受けた新五は、美濃・尾張の兵を率いて越中に侵攻、上杉勢相手に越中月岡野で大勝を収めた（注16）。津保城は、この時、前進基地として重要な役割を果たしたと考えられる。永禄末～天正初年の段階で、交通路・市場の整備、情報収集、調略など、飛騨・越中攻略に向けた準備は、すでに、本格化していたはずである。さらに見逃せない出来事として、天正元（1573）年の天正寺建立が挙げられる。津保城から5キロほど南に所在する臨済宗寺院であり、開山燈外宗晋は、飛騨安国寺住職や岐阜瑞龍寺輪番住山を務めた人物で、本山妙心寺の掟書にも名を連ねた高僧であった（注17、写真4）。飛騨や岐阜、京都を行き交い、織田本宗家ともつながった燈外が、津保に拠点を構えた意義は大きい（注18）。背後には織田政権の政治的意図があったと思われる。

このような津保における一連の動きは、郡上勢にとってみれば、領国を脅かす「敵対行為」と映ったのではないか。実際、家伝にも「津保・梶田（加治田）領主斎藤新吾と申者、郡上ヲ攻取んと…」「斎藤新五郡上ヲ心懸テ…」とあり、新五の侵略行為を強調する書きぶりとなっている（注19）。さらに「河合角左衛門口上聞書」には、「但馬守様（注：慶隆のこと）…御若年之時、津保之斎藤新五殿と度々御取合御座候…」とある（注20）。「御取合」とは奪い合いのことで、船野合戦以外にも慶隆・新五両者の間に領地や利権をめぐる争奪戦が度々あったことを示唆する史料である。

船野合戦のあった天正2年、慶隆は24歳、新五は23歳であった。ともに「御若年」である。諸史料を重ね合わせると血気盛んな若武者ふたりの姿が思い浮かぶ。船野合戦の背景には、織田家中での立ち位置の違い、津保・郡上双方の地域対立、積年の怨恨、一向宗門徒の多い郡上の土地柄等、様々な要因が重なり合っているのであろう。

（5）合戦の背景を周辺諸国の動きから探る

続いて、国内情勢から合戦の背景を探りたい。合戦が起きた天正2（1574）年は、信玄の後継者勝頼が、織田氏や徳川氏を激しく攻めた年であった。1月、勝頼は、信濃から東濃に侵入、4月までに苗木城、岩村城など計18ヶ城を攻め落とした。信長・信忠は反撃を企てたが、武田の猛攻の前に撤退を余儀なくされた。5月、勝頼は家康の高天神城を攻め6月にこれを占拠し、9月には浜松の城下町を焼き払った。信長・家康にとっては、勝頼に振りまわされた1年といっても過言ではない（注21）。この頃、勝頼と戦っていた上杉謙信は、再三にわたり信長に出兵を求めたが、信長が兵を動かさなかったため、苛立ちをあらわにする。事態打開を図るため、上杉家重臣河田長親に書状を送ったのは、取次役を務めていた新五であった（注22）。相次ぐ合戦への従軍、遠藤謀反への対応、さらには対上杉外交を同時にこなす新五及び家臣団の労苦は、並大抵ではなかったのではないか。

この間、信長は、勝頼の猛攻に苦しみながらも、伊勢長島一向一揆の鎮圧に乗り出し

た（注23）。信長・信忠父子は、7月13日、岐阜から伊勢方面に向かい、14日に長島攻撃を開始した。馬廻衆の新五や方秀も主君父子に同行している。激戦の末、信長は長島を攻略、9月29日、一揆勢を壊滅に追い込み、岐阜に帰陣している。

船野合戦は、まさにこのタイミングで始まった。慶隆は、信長や新五、方秀の留守を狙って攻撃に踏み切ったのであろう。家伝の伝える夜襲の日付はまちまちだが、諸史料を総合的にとらえると、神戸攻撃が7月14日（慶隆御一世聞書）、船野攻撃が8月14日（秘聞郡上古日記）だったのではないかと推察される。7月14日は長島攻撃・遠藤謀反の開始日であり、おそらくは一向一揆敗北の9月29日をもって遠藤謀反も終わったのだらう。

以上にみたとおり、史料から復元し得る天正2年の動向と、家伝の記録に残る船野合戦の顛末に大きな矛盾はみられない。船野合戦は、津保と郡上の地域対立という事情に加え、信長と反信長勢力の抗争という国内情勢を背景に起きた出来事であった。

（6）合戦の事後処理 ～信長の譴責と織田一門の危機～

新五との確執があったにせよ、慶隆が信長に反逆した事実は動かしがたい。それにも関わらず、『信長公記』や一次史料からは、慶隆が罰せられた形跡がうかがえない。疑問を抱き諸史料にあたった我々は、「粥川氏由緒書」（以下、由緒書と略）の以下の記載に注目した（注24）。由緒書には「慶隆が信玄に味方したため、信長が郡上に使者を派遣した。慶隆は立花山（美濃市立花）まで出向き、粥川家の子息甚右衛門もこれに従った」

「粥川らは信長に立ち向かうべく戦の準備を進めた。主命に従い自重しつつも撤退しなかった」「その後、無事に事が運び、何事もなく慶隆は帰った」と書かれている（注25）。

この史料に関し『郡上郡史』は、武田と通じた慶隆が、信長に譴責されたものの許されたと解釈する。そして由緒書に信玄の名が登場することから、この一件を信玄の西上作戦（1572-1573）と関連付ける（注26）。我々は、信長の譴責に関しては同意するが、時期に関しては、信玄ではなく勝頼の時代、すなわち天正2（1574）年のほうがより妥当と考える。確かに、信玄と慶隆は密書を交わしているが、慶隆が信玄に呼応して武力行使したとは、家伝を含めどの文献にも書かれていない。一方、天正2年には船野合戦が行われている。由緒書に信玄と書かれているとはいえ、郡上の中には信玄と勝頼を混同した事例があるので（注27）、由緒書に関しても誤記の類いと考えてはどうだろうか。

その後、遠藤勢は信長に従い、翌年5月の長篠の戦い、7月の越前一向一揆鎮圧で、めざましい活躍をみせた（注28）。裏切りへの寛大な処置に対し、必死になって報いるかのような行動である。信長の慶隆への寛容な態度は不可解にも思えるが、織田家の側にも事情はあった。伊勢長島の戦いの終盤、一揆勢の猛反撃により、信長の叔父信次や信実、兄信広、弟秀成、従兄弟信成・信昌・仙、義弟の信直や佐治信方等、有力な一門衆が次々討死したのである。一揆勢虐殺の陰で、織田一門も壊滅的といってよいほどのダメージを被っていた。「ぶざま」（谷口克広氏）、「織田家の総帥としての面目まるつぶれ」（和田裕弘氏）とまで言われる惨状であった（注29）。このような状況に加え、勝頼や本願寺といった強敵を抱えた状態では、慶隆を許さざるを得なかったのかもしれない（注30）。

（7）田口、蟹沢両名について

苗字のみで名前は伝わっていないが、新五の代官として船野を守っていた武将が、田口と蟹沢の両名である。田口は益田郡を本貫とする土豪であり（注31）、今でもこの地

域には田口姓が多い。沓部の北、祖師野に所在する祖師野八幡宮の宮司は、代々田口氏が相続し今日にいたっている（注32、添付資料・史料参照）。八幡宮には元亀元（1570）年の棟札が残されている（注33、写真5、史料2）。宝殿新築の棟札写であり、別当坊及び社家一門が、国王安穩とともに、地頭・代官・氏子の繁栄を願う内容となっている。

「地頭」は、元亀元年当時、この地の領主であった新五、「代官」は船野城の田口氏であった可能性が高いと考える。さらに「神主田口沙汰人」なる人物にも注目したい。この人物は「神主」であると同時に、村の指導者「沙汰人」でもあった。「神主田口沙汰人」は「代官」すなわち船野城の田口氏と同一人物か、もしくは近親者であったと考えたい。

むすびにかえて ～郡上・津保の抗争、その後～

「河合角左衛門口上聞書」の記載が示唆するように、境を接した津保と郡上の間には、商業利権や土地の境、交通網整備など、地域特有の問題が積み重なっていたと考えられる。遠藤家としては、家伝編纂の段階で、旧主信長をあからさまに批判するわけにもいかず、新五を名指しで槍玉にあげるほかなかったのかもしれない。新五にとって、加治田が本城であって津保は出城に過ぎなかった。であるにも関わらず「津保・加治田領主」「津保之斎藤新五殿」などと、ことさらに「津保」の地名を冠して呼ぶあたりに、郡上側の心理や、立ち位置が読みとれよう。

慶隆にとって新五は、沓部を奪った仇敵だった。対する新五本人は、馬廻衆として各地を転戦することが多かったので、領内統治はもちろん、遠藤氏への備えや対上杉外交も、加治田衆と呼ばれる家臣団、禅僧・商人らの側近が担っていたと考えられる。佐藤利堯や佐藤忠能ら親族、崖良沢、長沼三徳、西村治郎兵衛、湯浅新六ら有力家臣に加え、有力商人や禅僧が、その役割を果たしていたと思われる（注34）。加治田では、佐藤忠能、崖良沢らが実務を担っていたと考えられるが、津保の様子は文献がないので不明である。ただ、城郭や城下町の規模から、相応の組織があったと想像される（注35、写真6・7）。加治田衆の有力者が津保に常駐し、飛騨川流域の建築材を扱った商人の長谷川三郎兵衛や、天正寺の燈外らがこれを支え、津保支配や北方対策全般に関わったのではないだろうか。

新五討死（1582）ののち、求心力を失った加治田衆は四散し、可児郡金山城の森家の統治下に入った（注36）。津保城も、郡上新城主となった稲葉貞通の支配下に組み込まれた（注37）。新五の存在は人々の記憶から遠のいたようである（注38、写真8）。

添付資料 【補注】【図版】【写真】【史料】の順に掲載。【協力】は末尾に付す。

【補注】

(1) 八幡町教育委員会『郡上八幡町史史料編 1』1985に掲載。このほか国立公文書館デジタルアーカイブで『遠藤家譜』『遠藤家旧記』が公開されている。いずれも江戸中期以降の所産で、同系統の別本に相当すると考えられる。史料を参照。

(2) 遠藤氏には本宗家（八幡）と分家（木越）があり、両遠藤と称された。

(3) 佐伯哲也「船野城」『岐阜県中世城館跡総合調査報告書第4集飛騨地区・補遺』岐阜県教育委員会 2005

(4) 名和芳久氏（金山町船野地区在住）のご教示。

(5) 同上

(6) 『新撰美濃志』参照。江戸後期、尾張藩士がまとめた美濃国地誌。

(7) 地域の方々から、下記のような伝承やエピソードをうかがった。

- ・下沓部集落は郡上に内通し、城攻めの際には案内役を務めた。
- ・打尾集落に残るオシオキ（御仕置か）の地名は、郡上勢が城に籠った田口らを処断した場所と言われる。

- ・下沓部集落の昌満寺（臨済宗妙心寺派）では、近年まで合戦犠牲者の供養が行われていた。今も境内墓地の一角にその供養塔と言われる五輪塔（16世紀の所産）2基が残る。

- ・船野集落には軍装の地藏尊石像や銘文のない墓石2基が祀られている。年代不明。

- ・昭和20年代、地元の東小学校で、船野合戦の劇が学芸会で上演されたことがあるという。

(8) 郡上郡教育会『郡上郡史』1922では、神戸城を横井城（郡上市和良）に比定している。「奥御殿」と「斎藤佐玄太」なる人物の伝承を傍証とするが地名の一致はなく根拠は薄い。

(9) 「斎藤新五宛織田信長知行宛行状写」（備藩国臣古証文）、「斎藤新五宛織田信長黒印状写」（備前国臣古証文）に記載（富加町教育委員会『富加町史史料編』1975所収）。

(10) 関高等学校地域研究部「戦国・織豊期における飛騨川流域の製材と運材」『第18回全国高校生歴史フォーラム発表集』2024、同「東美濃三カ所城」をめぐって～山城と古文書から考える中濃の戦国史～』『岐阜県立関高等学校地域研究部報告第9号』2024

(11) 同上

(12) 八幡町教育委員会『郡上八幡町史通史編上』1960、小笠原春香『戦国大名武田氏の外交と戦争』2019ほか

(13) 東美濃の北方に広がる飛騨や郡上には、武田や上杉の勢力が及んでおり、その双方との安定した関係を望む織田信長にとっては、いたずらに介入することがはばかれる緩衝地帯でもあった。斎藤新五（加治田）と佐藤方秀（上有知）、ふたりの馬廻衆の領地は、その緩衝地帯と境を接する「織田政権北辺の要」に位置する。意図的な配置と考えられる。

(14) 津保城では、郡上街道に面した西斜面に計5本の堅堀を設けている。織田氏の直轄領だった関町の関城も、曲輪群や堅堀で北斜面の防備を厳重に固めている。織田政権は、佐藤方秀の鉦尾山城、新五の加治田城の2カ所を核とし、内通の恐れのある郡上への抑えとしたと考えられる。遺構の現状と考察については、森島一貴「関城」「鉦尾山城」『岐阜の山城』2010、森島一貴「大洞城」『東海の名城を歩く』2019が参考となる。なお、本稿で津保城と呼ぶ山城に関しては、大洞城の名称が定着しているが、誤認による命名が指摘されている（『富之保村誌』1925）。地域研究部では、戦国～江戸初期の文献で確認できる津保城の呼称を使用している。

(15) 「元亀元年越陣宛武田信玄朱印状」「元亀四年越中勝興寺宛浅井長政書状」、注 10 を参照。

(16) 関高等学校地域研究部「「月岡野の戦い」の検証と創作活動への応用に関する試論 ～歴史漫画『斎藤新五利治』の制作をめぐって～」『岐阜県立関高等学校地域研究部報告第 7 号』2023

(17) 横山住雄「永禄・元亀・天正期の飛騨安国寺」『飛騨の中世第 9 号』2018 を参照。燈外に関しては、堀祥岳氏（安国寺住職）、小西弘道氏（天正寺住職）からご教示をたまわった。

(18) 「瑞龍寺方丈棟札（天正九年七月）」（『南化玄興遺稿』）に、岐阜城主織田信忠の保護の下、燈外が方丈を再建したとある。燈外は瑞龍寺に塔頭臥雲院を建立したことでも知られる。

(19) 注 1 掲載の家伝を参照。

(20) 『白鳥町史史料編』1973 所収、高橋教雄『郡上の中世と遠藤慶隆』1998 参照。

(21) 平山優『徳川家康と武田勝頼』2023 ほか

(22) 「河田長親宛斎藤新五利治書状写」（富加町教育委員会『斎藤新五利治』2023）を参照。

(23) 池上裕子『織田信長』2012、谷口克広『織田信長合戦全録 桶狭間から本能寺まで』2002、和田裕弘『信長公記 戦国覇者の一級資料』2018 ほか

(24) 郡上郡教育会『郡上郡史』1922 より引用。原史料は「経聞坊旧記」に収録。

(25) 由緒書に登場する粥川甚右衛門は、船野合戦で主将を務めた人物である。

(26) 前掲（24）

(27) 「東家並遠藤氏家伝聞書」の中に「然所ニ信長より信玄を御退治被成、信長天下御治、追付太閤御代ニ罷成…」との記載がある（『白鳥町史史料編』1973 所収）。

(28) 長篠の戦いに際し、慶隆が派遣した弟慶胤は鳶ヶ巣山の戦いで軍功をあげた。越前一向一揆制圧戦においては慶隆自ら出陣した。越前で金森長近と合流、穴馬城及び大野城を攻め落としている（家伝）。『信長公記』によれば、長近は越前侵攻の前に郡上入りしたという。長近は、この時、慶隆に一向一揆との決別を迫ったと考えられている。慶隆はそれに応じ、織田家の武将として生きる道を選んだのであろう（小笠原春香「美濃郡上安養寺と遠藤氏」戦国史研究会編『戦国期政治史論集西国編』2017 を参照）。

(29) 谷口克広『織田信長合戦全録 桶狭間から本能寺まで』2002、和田裕弘『信長公記 戦国覇者の一級資料』2018 ほか

(30) 以後、織田政権は膨張を続けるが、織田家一門自体は打撃を受け弱体化した。

(31) 金山町教育委員会『金山町誌』1975

(32) 同上

(33) 「祖師野八幡宮棟札」は金山町教育委員会 1075 所収。添付資料・史料を参照。

(34) 富加町教育委員会『富加町史通史編』1984 ほか

(35) 高田徹「大洞城」『岐阜県中世城館総合調査報告書第 2 集』岐阜県教育委員会 2003、森島一貴「大洞城」『東海の名城を歩く』2019、『富之保村誌』1925、『上之保村誌』1938、『武儀町史』1992 ほか

(36) 富加町教育委員会『富加町史通史編』1984 ほか

(37) 八幡町教育委員会『郡上八幡町史史料編 2』1986

(38) 加治田や郡上には新五の文献・伝承が残されているが、津保地域では未確認である。

【図版】



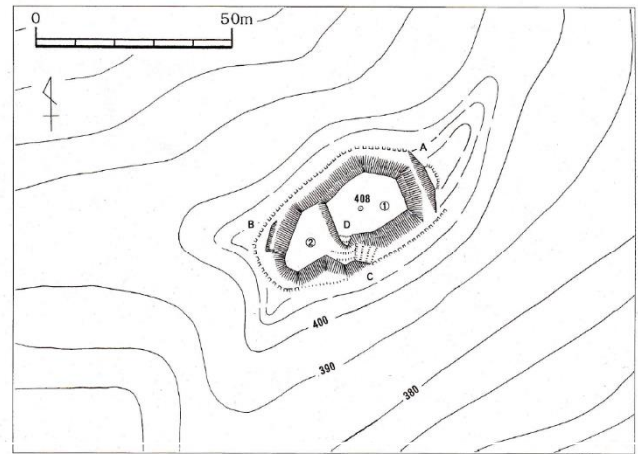
(1) 船野城・神戸城・津保城位置関係図（国土地理院）2024 ぎふ総文祭発表資料



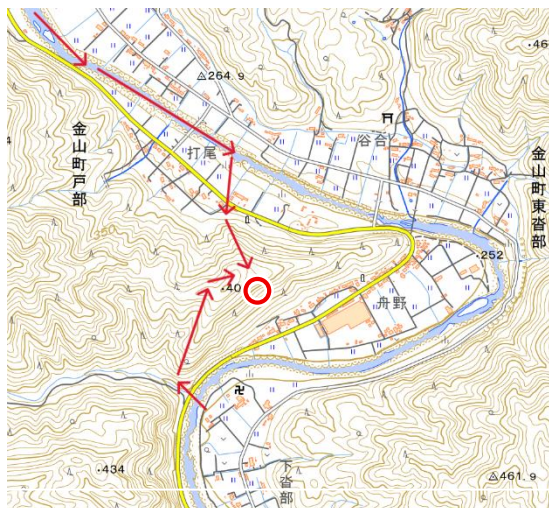
船野城と船野合戦に関する調査報告の様子（2025 年 5 月 17 日、下呂市）



(2) 船野城位置図 (国土地理院)



(3) 船野城縄張り図 注3文献より
①②曲輪 A堀切 B堀残存 C虎口



(4) 郡上勢侵攻想定図 (国土地理院)



(5) 神戸城位置図 (国土地理院)

【写真】



(1) 船野城 右から土塁・堀切・主郭切岸



(2) 船野城 堀切から切岸と主郭を臨む



(3) 神戸城推定地（関市上之保）



(4) 天正寺燈外宗晋像（関市下之保）



(5) 祖師野八幡宮棟札調査



(6) 津保城石垣（関市富之保）



(7) 津保城（関市富之保）



(8) 斎藤新五供養塔（京都市阿弥陀寺）

【史料】

調査対象とした史料のうち、郡上藩遠藤家家伝（『八幡町史史料編 1』1985 掲載）及び祖師野八幡宮棟札（『金山町誌』1975 掲載）の現代語訳を作成し掲載した。

（１）郡上藩遠藤家家伝のうち、『遠藤記』『慶隆御一世聞書』『秘聞郡上古日記』の翻刻及び現代語訳を掲載する。内容の分析、考察に関しては本文に詳述した。

『遠藤記』（宝暦七年、1757）

斎藤新吾郡上へ攻来ル事

天正二年当国津保梶田領主斎藤新吾と申者郡上ヲ攻取んと人数ヲあまた神戸山に楯籠ル之所新兵衛胤基之討手として吉田左京進竹村弥平吾蓑嶋弥兵衛に被仰付夜打にして攻落ス、同年九月斎藤新吾が残党田口蟹沢之兩人郡上沓部村船野山に楯籠ル所慶隆之討手として鷲見弥五左衛門遠藤作衛門（勘解由之事）並餌取氏組下之者共指向十月十四日の夜不意に押寄せ甚右エ門計略ヲ以て竹にて階子ヲ数多用意し陰山の岩壁フ安々・登り陣中に乱入切テ廻レハ兼而より案不知の斎藤勢逃ルニ通なく防くに術なく散々に成て追落され討る者数不知不覺也し事共也粥川甚右門ハ蟹沢ヲ計取作右工門ハ一方より忍入しに無難田ロヲ討取即時ニ城ヲ乗落しける此時餌取六右衛門家の子和田源左エ門山崎縫殿之介討死ス粥川甚右エ門此度の戦功拔群成りとして沓部村ヲ被下ケリ

<現代語訳> 天正 2 年、当国（美濃）津保・梶田の領主である斎藤新吾という者が、郡上を攻め取ろうと多数の兵を集め、神戸山に立て籠もりました。これに対し、新兵衛胤基は討伐隊を編成し、吉田左京進・竹村弥平吾・蓑嶋弥兵衛らに命じて、夜襲を仕掛けさせ、これを攻め落としました。同じ年の 9 月、斎藤新吾の残党である田口・蟹沢の両名が、郡上の沓部村にある船野山に立て籠もりました。これに対して、慶隆は討伐隊を送り、鷲見弥五左衛門・遠藤作衛門（勘解由）をはじめ、餌取氏配下の者たちを指揮して向かわせました。そして 10 月 14 日の夜、不意をついて討伐隊が押し寄せました。粥川甚右衛門は計略を巡らし、竹で多数の竹梯子を準備して、険しい山の岩壁を苦もなく登り、敵陣に乱入。敵を切りまくると、斎藤勢はあらかじめ逃げ道を把握していなかったため、退路もなく、成す術もなく四散し、追い落とされ、討ち取られた者の数は知れませんでした。この戦いで、粥川甚右衛門は蟹沢を討ち取り、遠藤作右衛門は別の方向から忍び入って、田口らを討ち取り、そのまま即座に城を奪い落としました。しかし、この戦いの中で、餌取六右衛門家の子・和田源左衛門と山崎縫殿之介が討死しています。粥川甚右衛門はこのたびの戦功が拔群であったため、恩賞として沓部村を与えられました。

『慶隆御一世聞書』（年代不詳）

一 同二年津保梶田領主斎藤新五郡上ヲ心懸テ人数々多神戸山ニ楯籠候處、慶隆様ヨリ為討手ト粥川甚右衛門被仰付為加勢鷲見弥五衛門遠藤作右衛門並餌取氏組下之者共被指向七月 十四日ニ夜討ニ仕候。陰山故甚右衛門以武略竹梯子数多致用意岩壁をつたひ蟹沢を討取暫時に城を攻落候。作右衛門ハ一方より忍入田口を討取中候。此節餌取六右衛門家之子

和田源左衛門山崎縫殿助致討死候。右忠節として沓部、粥川に被下候。

<現代語訳> 天正 2 年、津保・梶田の領主である斎藤新五が郡上を手に入れようと考え、多くの兵を率いて神戸山に立て籠もりました。これに対し、慶隆様は討伐軍として粥川甚右衛門に出陣を命じ、さらに加勢として鷲見弥五衛門・遠藤作右衛門、そして餌取氏配下の者たちを指揮して差し向けました。7 月 14 日、夜襲を仕掛けました。神戸山は険しい山でしたが、甚右衛門は武略を巡らし、竹で数多くの梯子を準備し、岩壁をよじ登り、蟹沢を討ち取ったうえ、ほどなくして城を攻め落としました。一方、遠藤作右衛門は別方向から忍び入り、田口を討ち取りました。しかし、この戦いの中で、餌取六右衛門家の子息・和田源左衛門と山崎縫殿助は討死しました。この忠義と戦功への褒美として、沓部村が粥川に与えられました。

『秘聞郡上古日記』（文政六年、1819）

一 天正二年津保梶田領主斎藤新五攻来神戸山ニ楯籠所、為討手吉田左京進竹村弥平次箕嶋弥兵衛ニ仰付夜討ニ攻落、同年斎藤新五残党田口氏蟹沢氏沓部村船野山ニ楯籠所、為討手粥川甚石衛門加勢鷲見弥五右衛門遠藤作右衛門並餌取氏組下共被差向八月十四日夜討にす、険山故粥川以武略竹階子多致用意岩壁を傳ひ蟹沢を討取、作右衛門へ一方より攻入田口を討取、此節六右衛門家子和田源左衛門山崎縫殿助討死、此時之為忠節沓部村粥川ニ被下

<現代語訳> 天正 2 年、津保・梶田の領主である斎藤新五が攻め寄せ、神戸山に立て籠もりました。これに対して討伐軍が編成され、吉田左京進・竹村弥平次・箕嶋弥兵衛に命じて夜襲を仕掛け、城を攻め落としました。同じ年、斎藤新五の残党である田口氏と蟹沢氏が、郡上の沓部村・船野山に立て籠もりました。これに対して討伐軍が再び編成され、粥川甚石衛門が討伐隊の主将となり、加勢として鷲見弥五右衛門・遠藤作右衛門、さらに餌取氏配下の兵たちも差し向けられ、8 月 14 日の夜、夜襲を仕掛けました。険しい山だったため、粥川甚石衛門は戦略を巡らせ、竹で多くの梯子を準備し、岩壁をよじ登って蟹沢を討ち取りました。また遠藤作右衛門は別方向から攻め入り、田口を討ち取りました。しかしこの戦いで、餌取六右衛門家の子である和田源左衛門、そして山崎縫殿助が討死しました。このときの忠義と戦功への褒美として、沓部村と粥川村が与えられました。

（2）「元亀元（1570）年 12 月祖師野八幡宮棟札写」の翻刻及び現代語訳を掲載する。昨年 5 月、棟札の現地調査を行ったところ、現物ではなく写であることが判明した。元亀元年の年号から考え、願文中の「地頭」は領主の斎藤新五をさすと考え。同じく願文中の「代官」と「神主田口沙汰人」、船野城で討死したとされる「田口」は、同一人物もしくは同族と推測する。

元亀元年、信長は、朝倉、浅井、延暦寺と対立、幕府や調停の仲裁を得て事なきを得ている。11 月。朝倉と浅井は將軍義昭の仲裁に応じ、頑強に抵抗していた延暦寺も、12 月には正親町天皇の勅命により和睦に応じている。願文にある「十二月吉日」の日付、「天長地久國王安穩武運長久」の文言は、この間の事情と関わると考える。

八幡宮御寶殿造立之事

聖主天中天 迦陵頻伽聲 哀愍衆生者 我等今敬禮

右神念者故地頭代官宇治子繁昌天長地久國王安穩武運長久求願圓滿

如意満足別者郡内安穩并在処榮養五穀成熟富貴自在息災延命

七難即滅 七福即生

殊者現世安樂後生善処自他和合皆令満足将仍如件

于時元龜元庚午十二月吉日 衆徒馬一疋 代官馬一ツ

別當坊 □□

大禰宜

小瀬宜

神主 田口沙汰人

納人馬一疋

小神主 馬田

大工家次

小工

<現代語訳> 天におわす尊き主(釈迦牟尼仏のこと)よ、天の中の天におわし、迦陵頻伽(極楽浄土に住む美しい声を持つ想像上の鳥)のように、その声は清らかにして、哀れみ深く衆生を救い給うお方に、私たちは今、心より礼拝いたします。この神(釈迦牟尼仏)を念ずる者、すなわち地頭や代官、氏子たちが繁栄し、天は長く地は久しく、国王は安泰、武運は長久なることを願うてのことです。願わくは、すべての願いが満ち足り、郡内の人々が平穩に暮らし、住むところには栄えある養いがあり、五穀は豊かに実り、富貴を自由に得、災いを退け命を延ばすことができますように。七つの難(災難)はすぐに消え、七つの福(福德)はすぐに生まれますように。とりわけ、現世において安樂であり、来世には善き処(極楽)へと生まれ変わり、自他ともに和合し、みな満ち足りたることとなりますように。このように願いをこめて。

時に、元龜元(1570)年 庚午 十二月吉日

・衆徒：馬一頭

・代官：馬一頭

・別當坊：□□(記名不明)

・大禰宜

・小瀬宜

・神主：田口沙汰人

・納人：馬一疋 (馬の奉納)

・小神主：馬田 (馬の飼料の奉納か)

・大工：家次

・小工：(記名不明)

追記：ほかにも紹介すべき郷土の史料は多数あるが、紙数の関係上、最も重要なものにとどめた。

郷土史でまちづくりにチャレンジ！

～歴史マンガと足軽デリバリーで未来につなぐ～

森翔吾 渡辺俊太 岩原知哉 佐藤孝亮 土本徳哉

はじめに ～郷土史探究からまちづくりへ～

岐阜県立関高等学校地域研究部は、2019年夏以来、加茂郡富加町内で戦国時代をテーマとしたフィールドワークを行ってきた。地元の戦国武将たちの動向と当時の国内情勢がどのように関わったのかを文献調査や史跡踏査を通じて明らかにし、様々な機会を利用して発表を行った。

研究内容に関しては、日本考古学協会総会高校生ポスターセッション優秀賞（2024）、全国高等学校総合文化祭郷土部門歴史・考古分野最優秀賞（2025）等、高い評価を得、さらに関市や下呂市、富加町など、関係市町での発表の機会も得た。

こうした活動を通じて、私たちは、地元への愛着が深まり、自分たちのまちに誇りが持てるようになった。「郷土史は、まちの元気のみなもとになる。より多くの方々に、郷土史に親しんでいただきたい」。そんな思いを抱いた私たちが、痛感したことがひとつあった。私たちの郷土探究に対し、関心を寄せてくださる方々の性別や年齢層に、かたよりがみられることである。私たちの感覚では、女性に対し男性の比率が高く、年齢層が比較的高いことが、おおむねの傾向に思えた。

郷土史への関心を高め、これをまちづくりへとつなげていくためには、性別に関係なく幅広い年齢層に広めていくことが必要だろうと考えた私たちは、現在、自治体や企業、NPOなど、さまざまな方々と一緒に、郷土史の学びを、幅広い年齢層に広めまちづくりに生かす活動を進めている。

今回は、そんな私たちの活動を報告したい。タイトルは「郷土史でまちづくりにチャレンジ！歴史マンガと足軽デリバリーで未来につなぐ」である。

活動の現状

現在行っている活動は、①戦争遺跡、②里山の聞き書き、③戦国時代の3分野である。以下に簡単に紹介したい。

① 戦争遺跡の研究

大戦末期、関市から美濃加茂市、坂祝町にかけての地に、本土防衛のための秘匿飛行場がつくられた。私たちは地域の方々への聞き取りや測量などの調査を行い、学びの成果を発表会や現地説明会で共有した。忘れられようとしている戦争の記憶をいかにして伝えるか。昨年度末、市役所や観光協会、大学など、様々な方々に集まっていただいて会議を行い、その様子はテレビでも報道された。

② 里山の聞き書き

自然の恵みを生かした昔ながらの暮らし、そうした暮らしを支えてきた技術や伝統的な価値観は、生活スタイルの変化で、急速に失われようとしている。私たちは、自治体やN

POと協力し、聞き取りの記録を残すと同時に、先人の知恵を現代に生かすことができないか、模索しているところである。

③ 戦国時代

斎藤道三や織田信長など、著名な武将が活躍した岐阜県内には、城郭をはじめとする戦国の歴史遺産が数多く残されている。私たちは、各地を訪ね歩き、新たな史実を探り当てると同時に、多くの方々に親しんでもらえるような工夫を重ねている。

歴史マンガと足軽デリバリー

私たち3年生5名は、1年次より、地元の戦国時代に関する研究を行ってきた。文献史料を精査し、史跡の踏査を繰り返す中で、新たな史実や解釈を見出すこともあった。自治体史等の舞台となった史跡を繰り返し訪れ、貴重な文化財に幾度も触れることができるのは、まさに郷土史の醍醐味と言える。

こうした醍醐味を、地域の方々、特に若い層に味わってもらえるよう工夫をこらし、提案として磨き上げていく。そんな活動を行う中、特にインパクトがあると感じたふたつの手法がある。それが、「歴史マンガと足軽デリバリー」であり、このふたつに共通するコンセプトは、「エンタメで楽しく学ぶ戦国史」である。

歴史マンガについて

まずは歴史マンガから説明したい。戦国の歴史の魅力を発信し、幅広い年齢層に親しんでもらうため、富加町教育委員会は、歴史マンガ発刊に取り組んでいる。

そもそもこの事業は、みのかも定住自立圏のイベントのひとつとしてはじまった。美濃加茂市及び加茂郡の6つの市町村は、定住自立圏と呼ばれる緩やかな枠組みを構成し、福祉や教育、医療、防災等の諸分野で、それぞれの強みを生かし助け合う活動を行っている。歴史マンガのテーマとなった「織田信長の東美濃攻略」は、まさにこの地を舞台とした出来事であり、関連史跡や古戦場は今も各地に残されている。こうした歴史的資源を生かし、まちづくりにつなげていこうとの意図で、定住自立圏のうち、富加町、美濃加茂市、坂祝町の3市町により、マンガの制作と発刊が続けられた。第一弾『夕雲の城』、第二弾『猿啄の春』の2冊は、3市町の枠組みで、第3弾は富加町による単独事業として行われた。関高校は、この企画第3弾「斎藤新五利治」の制作に協力し、シナリオづくりや時代考証を担当した。

主人公の斎藤新五は、道三の息子として生まれ、信長に仕えた実在の人物である。史実と矛盾しない範囲で、フィクションを加える。第三弾のマンガは、学芸員やマンガ家の先生、文芸部と一緒に、調査や議論を重ねてあがった作品である（2023年発刊）。このシリーズは好評で、増刷を重ねている（右写真）。

歴史マンガを読んだ中学生が、関高校の地域研究部に入部する。そんなうれしい出来事も起きている（計8名）。また、地域連携による郷土史調査により、歴史像の見直しも進んでいる。こうした流れを未来の世代につなぐためには、マンガが有効だと考えた私たちは、富加町役場に続編制作の請願書を提出した（2024）。

うれしいことに、町長さんをはじめ、役場や議会の皆さんに承認していただけた。歴史マンガ第4弾は、現在、制作中である。今回、私たちは、マンガのシナリオ40ページ分に



加え、巻末資料編も担当する。資料編では厳密に史実を語り、マンガでは想像力豊かにフィクションを交える。今回も文芸部と協力し、楽しくも神経をすりへらす作業を進めているところである（2025年度3月刊行予定）。

足軽デリバリーについて

次に、足軽デリバリーに話を移したい。戦国の山城には、堅堀や切岸、堀切、曲輪といった、攻め寄せる敵を撃退するための施設がある。ただし、土を削ったり盛ったりした遺構のため、山城を訪れても、専門的な知識がないと自然地形との区別が難しく見逃しがちである。

富加町の歴史マンガを担当した漫画家の渡辺浩行先生は、『チャンバラガールズ』という作品を制作している（未公開）。このマンガに登場するS高校のモデルは関高校であり、マンガには、山城を舞台にスポーツチャンバラをする女子高生が登場する。マンガの中には、堅堀や曲輪などの遺構が、作画とセリフでわかりやすく説明されている。渡辺先生は、マンガを読みながら山城の面白さをわかってもらおうと、このマンガを描いたとのことである。

よし、これだ！ 私たちは、山城でスポーツチャンバラを実演し、皆さんに楽しんでもらおうと思いついた。しかし、スポーツチャンバラは習得に時間がかかり、しかも道具類をそろえるのに相当な費用が必要であることが判明したため、別の方法を探ることにした。

日頃お世話になっている富加町郷土資料館館長の島田崇正さんと話し合い、足軽に扮した模擬戦をやりながら、遺構の説明をしたらどうかということになった。名付けて、足軽デリバリー。あちこちの山城に出かけ、地域の皆さんに、楽しみながら学んでもらうのが狙いである。このイベントを行うにあたっては、富加町郷土資料館のボランティアの皆さんが、そろいの足軽Tシャツと陣笠を、手づくりで用意してくださった（右写真）。



話し合いの結果、今年の2月、富加町の山城、加治田城で行われたイベントで、足軽デリバリーを披露することになった。このイベントは、スポーツ推進委員会企画のレクリエーション、「歩け歩け大会」として行われた。こどもからお年寄りまで、幅広い年齢層の皆さんが、健康づくりのために参加するイベントである。ハイキングやトレッキングなどのかねた歴史探訪は、健康づくりにも最適だと、あらためて思った。

幸いなことに、参加した皆さんからは、「話を聞くだけよりもわかりやすく、迫力もあったのでおもしろかった、何気なく登っていたけど、歴史背景を知って驚いた、一緒にやってみたい」などと、高い評価をいただいた。実際に、私たちと一緒に参加してくれる小さなこどもの姿も見られた。郷土資料館の島田さんからは、「遺構を用いての実演で理解度がより高まり、見ている人も盛り上がる良い活動だ」と評価していただいた。見学者の方々との一体感が生まれ、私たちも楽しく実演できた。

現在、私たちは、地域のほかの山城でも、デリバリーのリハーサルを重ねている。11月には、関市立安桜小学校PTAと連携した山城遠足を実施する予定である。先月、PTA役員の方々とのリハーサルを行った。役員さんからは、「自分たちも参加できる活動でとても楽しかった、これなら子どもたちにも歴史の魅力や楽しさが伝わる」などのご意見をいた

だいた。参加した小学生の皆さんからも、「楽しかった、またやりたい」と、うれしいコメントをいただいた。

次世代につなぐ

歴史マンガと足軽デリバリー。エンタメで楽しみながら学ぶ郷土史。私たちは、未来をにう子どもたちや家族の皆さんに、郷土史を楽しんで学んでもらいたいと考えている。幼いころからごく普通に、郷土の自然や歴史に親しめる環境があれば、郷土への愛着や誇りが、自然に身に付くと思うからである。

もっと多くの子どもたちが、郷土史に親しめる機会がないか。そんなことを考えていた矢先、美濃市立美濃小学校から、うれしいお誘いをいただいた。子どもたちが、市内にある山城、鉾尾山城に遠足に出かけるので、事前・事後の学習をやってもらえないかとのお話だった。

美濃小学校の長尾亮先生のアドバイスを受けながら、楽しくわかりやすい学びになるよう、郷土史を題材にしたクイズを使って講座を行うことにした。講座は、昨年度と今年度、計2回実施した。

第1回は昨年11月に行った。実際にやってみると、はじめは興味を示していなかったような子も、話をしていく中でだんだんと興味を持ってくれ、私たちも手ごたえを感じた。子どもたちからも感想が届き、「美濃市のことが好きになった、楽しかったからまたやってほしい」など前向きな意見を多くいただいた。

しかし一方で、この方法ではクイズを解いただけで終わってしまい、自分から学ぼうとする姿勢をつくれないう問題があるのではないかと感じた。感想にも、楽しかったというものは多かったが、歴史自体の面白さに関するものは少数であった。

反省を踏まえ、今年6月の講座では、答えにたどり着くまでにヒントを少しずつ出していくことにより、自分で考え、答えを見つけることの楽しさを知ってもらうように工夫した。改善によって、前回の講座よりも質問が多く、まわりと話しあって自分たちで答えを出そうとしている姿も見られた。いただいた感想にも、「地域の意外な事実を知ることができて面白かった、歴史には興味はなかったけど興味をもてた、歴史の勉強が楽しみになった」などの地域・歴史について触れているものが多くみられた。また、「地元への興味が出てきてもっと調べたい、家族にも教えたい、地域研究部に入りたい」という、探究心が芽生え、郷土史の輪をさらに広げる意欲をみせてくれるような心強い感想もあった。

2回の出前講座で、小学校の郷土学習や子どもたちの現状について知ると同時に、歴史を学ぶためのきっかけを作ることができた。今後も活動を続け、訪れる学校を増やしたいと考えている。

来年春3月、美濃小学校の子どもたちや先生方と山城に登り、一緒に足軽デリバリーを楽しめないか。現在、計画しているところである。

むすびに

以上、歴史マンガ、足軽デリバリーを軸にした活動を紹介した。もちろん、私たちだけでできる取り組みではなく、地域と連携してこそ可能な活動である。もともと、郷土史の調査からはじまった活動だが、今では、地域や世代を超えた活動へと広がりをみせている。最後に、活動の広がりの様子をいくつか紹介したい。

私たちのフィールドのひとつ、関市の津保城は、斎藤新五の拠点であり、制作中のマンガにも登場する重要な城であるが、倒木や風水害により登山路が崩れてしまい、見学に不便な状態が続いていた。昨年度末に、関市役所が、学術的な観点はもとより、地域振興のために必要であると判断し、登山路を整備してくださった。

発表会や現地セミナーのお誘いも複数いただいている。今年 5 月、現在、制作中のマンガの舞台、下呂市金山町で、山城セミナーを開催した際には、地区の集会所に、80 名もの方々が集まってくださった。あいにくの雨で、山城には登れなかったが、「次回ぜひ足軽デリバリーをやってほしい、楽しみにしている」とのお言葉をいただいた。このほか、関ヶ原古戦場記念館や岐阜県文化財保護協会からも、講演依頼をいただいている。

私たち戦国研究班とは別の、特攻飛行場の研究班（2 年生）も、終戦 80 年ということもあって、この夏、関市・坂祝町・美濃加茂市の 3 カ所で講演を行う予定である。聞き書きのグループ（2 年生）も、8 月に美濃加茂市や加茂郡のイベントで発表を行う準備を進めている。

校内にも新たな動きが出始めている。例えば英語部は、歴史マンガ『斎藤新五利治』の翻訳を本格的に開始した。今年度 3 月の発刊に向けて英訳作業を進めているところである。

関は世界的に有名な刃物の町、刀剣の町で、最近ではインバウンドが増加している。10 月開催の刃物祭りは、毎年 10 万以上の人出でにぎわう。来年の刃物祭りには、海外の方々に、英語版歴史マンガや英語解説付き足軽デリバリーを楽しんでいただけるよう、文芸部や英語部、地域の皆さんと力を合わせて頑張りたい。

関高校地域研究部との共同研究活動を振り返って

島田 崇正(富加町郷土資料館 館長)

関高校地域研究部と富加町による「戦国期加治田城研究」は 2019 年に始まる。部員のみなさんが顧問の林先生に率いられ加治田城と堂洞城を踏査するということで、ご案内させていただいたのが始まりと記憶している。美濃加茂定住自立圏事業（富加×美濃加茂市×坂祝町）として織田信長の東美濃攻略を取り上げた『夕雲の城』を発刊して、ちょうど 2 年が経ったころだった。踏査に来た当時の部員の中に、中学生の頃にこのマンガを読んだ子がいたのがきっかけだったと聞き、山城跡の説明にも熱が入ったのを覚えている。『夕雲の城』は発刊の際に、3 市町のすべての小中学生に配布した。反対する意見や、揶揄する声もあった。しかし、これは市町とマンガ作者からの「郷土を大切にしたい」というメッセージなのだと全子配布を決断した。そのマンガ配布が彼らとの繋がりを作ってくれたのであり、望外の喜びだった。その後も『夕雲の城』を持っている部員は何人もいたと記憶している。

加治田城を踏査した部員たちは、城の歴史だけでなく城の構造に興味を示したのは意外だった。加治田城の「虎口」石垣の説明を聞いて、とても盛り上がったのである。こうして共同研究は、関連する山城の現地踏査を中心に史料見学を実施し、それを毎年繰り返していったように思う。コロナ禍に突入し不自由を強いられた時期もあったが、活動は継続され、中には知り得た知識を「普及」したいとアイディアを提案する部員も現れ、SNS 発信や富加町でのシンポジウム開催、夕雲の城ツアーの企画や実証実験などが試みられ、驚きの連続だった。われわれ学芸員も研究とともにそれを発信し、普及活動に結びつけることで、社会に還元し社会との結びつきを模索する。かれらも自ら考えることで、そこに行きついたのである。普及活動の大切さや方向性について考えさせられたものである。

こうした活動の継続は、令和 4 年の富加町による加治田城主「斎藤新五利治」のマンガ制作での高校生によるシナリオ（一部）制作に結び付く。実は、マンガ『夕雲の城』の制作のときに漫画家の渡辺浩行先生と何度も検討を重ね、もっとも注意したのは史実と創作のバランスだった。史料を掘り下げ、史実に忠実に向き合うことを常とする私たち学芸員にとって、史料の空白を埋める作業は頭を悩ませたが、それが地域を深く考えるうえで、ひいては歴史を考えるうえで貴重な経験となった。それを高校生諸君に体験し、考えてもらおうというのが依頼のねらいだった。結果は、われわれの意図を見事に汲み取り、想像を超えるものだった。詳細は富加町発刊の『斎藤新五利治』をご覧ください。

さて、本号は令和 5 年度世代（7 年度卒業生）の部長だった森君を中心に執筆した研究報告であるが、かれらが活動したのは『斎藤新五利治』刊行後である。令和 5 年 7 月に実施した定例の加治田城・城下町踏査が初対面だった。加治田城主であった佐藤紀伊守忠能が菩提寺として建立した龍福寺を見学し、戦国期文書の実物や忠能の肖像画を見学しテン

ションが上がる部員をつれ、龍福寺大門前にあった武家館跡の説明をした。この館跡は同時代文書に龍澤屋敷などと表記され、『信長公記』で織田信長への内応を伝えた加治田方の使者崖良沢のものと推定されているが、現状はほとんど残っていない。わずかに龍福寺の参道が土塁の痕跡の可能性を伝えるのみである。文書や地割図、残存土塁（参道）などから推測する、非常に複雑な私の説明を、かれらは理解しようと必死に資料と現地を照し合わせ、部員同士で話し合っていたのが印象的だった。次の見学場所へ移動しようとしても、その場にとどまり部員同士での議論がはじまっていて、暫くそのまま様子を見ていたのが懐かしい。その後も、疑問点が消えなかったのか、道中で私に質問したり、意見をぶつけてくる部員がいて、とても嬉しかった。

この令和5年度世代の部員たちの特徴は、議論することが自然だったことだと思う。これは部の風土として、その後の世代にも受け継がれているように感じる。議論の中で、自然にそれぞれが課題や問題点、自分の意見を形成していた。かれら令和5年世代とはシンポジウムやパネルディスカッションで同席する機会が多くあったが、私からの予定外の質問にも自分の言葉で伝える意思を感じた（いつも打ち合せ無しの無茶振り質問ばかりだったこと、この場でお詫びしておこう）。これはやはり日頃の議論の賜物である。これからの進学先や、その後の社会においても必要な力であることは間違いない。培った力を存分に発揮して欲しいと願っている。

加治田城研究は現在、加治田城の統治した「領域」全体をみることで、当時の織田政権での位置づけの評価や、政治史、流通経済史、交通史的な観点へと広がりを見せている。これは令和5年世代が取り上げた越中勝興寺宛浅井長政文書における「東美濃三カ所城」の再評価がきっかけとなった。詳細は本研究報告掲載の論文をご覧いただきたいが、これにより津保城の評価が明確となり、立地や地域史料等の検討から木材流通などと絡めた考察へと発展していた研究過程は、私たち学芸員も知見を広げる大きな契機となった。

そして令和5年世代は前の世代から受け継いだ「郷土史の普及活用」にも力を注いだ。小中学校などさらに次世代へ伝える活動を切り開いた。身近な世代の高校生が伝えることは、子どもたちの受け取り方も違うだろう。それがどのように芽吹くのか楽しみである。そして山城遺構の魅力を伝えるために考案した「足軽デリバリー」は、いまや地域研究部の代名詞？でもある。これも先代からの「史跡を知った感動を伝えたい」という研究風土の下に部員の思いが形になったものである。

さらに令和5年世代は夕雲の城の続編制作を富加町に嘆願書という形で提案した。無事制作の運びとなったが、かれらは3年生となり受験を控えたため関われなかった。しかし見事に令和6・7年世代が引き継いで『乱世の岐路』を完成させてくれた。

加治田城研究も8年目に突入し、ある種の研究風土のようなものが醸成されつつあり、新入生たちはその風土に触発され、学びを深めているように感じる。受け継いだものを大切にしつつ、ぜひそれぞれに個性を発揮して欲しい。高校生諸君と一緒に踏査に出掛けるのを毎年楽しみにしています。



加治田城の踏査 2023.7

卒業生からのメッセージ

部活動での日々は、これまでの人生でも特に濃密なものであった。現在の進路を考えたきっかけも、ここでの活動が影響している。私の中で一つの分岐点となったこれまでの活動を、当時の心境も交えながら振り返る。

入部前、活動概要を聞くために顧問である林先生のもとを訪ねた。中学時代からの仲間たちとともに、緊張しながら部屋の扉をたたいたことを今でも鮮明に覚えている。その際に、マンガ『斎藤新五利治』についてもお話があった。この漫画自体はこの時に初めて知ったが、関高校が携わる前に発刊されている『夕雲の城』『猿啄の春』は小学生の頃に読んだことがあった。まさかその調査の続きに携わることになるとは、驚きだった。

私たちの調査の原点は、本研究報告掲載の論文でも取り上げられている、「越中勝興寺宛・浅井長政書状」につまっている。私たちの代の部員は、全員が美濃市出身という共通点を持つ。本書状には、これまでも斎藤新五の研究がなされていた富加町、高校の所在する関市、そして出身である美濃市、三市町が関連付けられるものであった。馴染みのある美濃市に関しても調査できることに対して、喜ばしい気持ちになった。

初めての現地踏査は、富加町を訪れた1年次の7月であった。富加町の島田さんと漫画家の渡辺先生に初めてお会いし、その地について知らない私たちに加治田城をはじめとする史跡について丁寧に解説してくださった。これからの研究に対しての期待が膨らんだ瞬間である。同時に、そこで活動する先輩方の背中をみて、「私たちに成し遂げることができるのか」という不安も入り混じっていた。

その後も、研究が進展する度に多くの場所に足を運んだ。北は下呂市金山、南は関市迫間。斎藤新五及び上有知佐藤家の支配下はほとんど踏査した。それぞれの地がそれぞれの役割を担っていることを実感し、歴史研究の面白さを噛みしめていた。文献調査でも、各人の思惑を考えるにつれて、思考が深まる過程を楽しんでいた。現地踏査も文献調査も、常に見えない問いが生まれ、研究を発展させることにつながっていったと感じている。

歴史研究としては2年次の冬に一度幕を閉じ、それ以降は、まちづくりに活用する方法を模索した。現地講演や足軽デリバリー、小学校での出前授業など、活動の幅は多岐にわたり、微力ながらもまちの魅力発信をおこなうことができたと思っている。特に小学校での出前授業で子供たちから真剣な眼差しを受けたことは、さらなる活動の原動力となっていた。

活動を通じて、私自身も地元に対する郷土愛がこれまで以上に深まったと感じている。ここでの学びや芽生えた興味を、これからの学びにもつなげていきたい。

最後に、ここまで活動を続けてくることができたのは、顧問である林先生、可児先生をはじめ、島田さんや森島さんなどの行政機関の方々、漫画家の渡辺先生、そして地域の皆様、多くの方からのご協力・ご声援があったからです。改めてお礼申し上げます。

(森 翔吾 岐阜大学)



津保城の踏査 2024.11

中井均先生、春風亭昇太郎匠に同行

小学校の出前講座が特に印象として残っている。小学生中学年になると勉強に対しての意欲などが低くなっている年齢だろうと思っていたが自分たちの考えてきたクイズにとっても積極的に取り組んでくれる姿をみてうれしかった。

城跡を訪れて足軽デリバリーを実施するときにはどのように仕掛けを利用しているところをみせるのかを考えるのが学校の授業などではないことで楽しかった。

同じ城跡に行くごとに新しい見方や考えなどが出てきて面白かった。
(岩原知哉 福井大学)

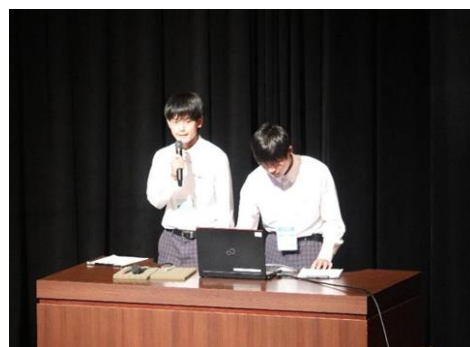


関市春日神社にて 2023.10
能舞台で体験学習

地域研究部に入部したての頃の私は、自分の住んでいる地域の歴史のことでさえほとんど知りませんでした。しかし、実際に史跡を訪れ調査・活動をしていく中で、多くの歴史を知ることができました。その中でも、特に美濃市にある鉾尾山城が織田信長とも関係のあったことはとても驚きました。自身の身近に、教科書で学ぶような歴史と関係のある歴史があり、それが郷土愛や地域に対する一つの誇りとして自分の中に生まれていきました。

また、自分たちが調べたことを多くの人に発信していく活動も行いましたが、ここでは歴史が人をつなぐ、ということが多く見ることができました。幅広い年齢層が地域の歴史で盛り上がる様子を何度も見ることができ、とても温かい気持ちにもなることができました。

地域研究部で活動した約3年間で、自分にとって地域に対する愛着などを芽生えさせただけでなく、人と人をつなぐ大切な一つの交流の道具でもあると気づかされました。そして、地域研究部で学んだことは自身の価値観やこれから先社会へ出ていくことにおいて重要な経験になったと強く感じます。
(渡辺俊太 静岡大学)



全国総文祭（ぎふ総文） 2025.8
郷土研究部門最優秀賞受賞

津保川流域の山みちについての備忘録

林 直樹（地域研究部顧問）

… 飛騨や美濃の山場の町村について、昭和二、三十年代の地図と現在のものを照らしあわせると、前者にはあって後者にはないものがある。それは車の通わない、車の通えない山道・小道である。尾根筋の峠にかかる網の目のような点線の小道がそれである。

飛騨をはじめ、奥揖斐や郡上といった奥美濃地方の山間部や東濃地方には、平面の地形図上では目と鼻の先でも、車社会が当たり前になった現在、立派な道路を通っても三〇分ないし小一時間を要する地区間は少なくない。しかし、前述の点線で記された小道を通ると、現代人の脚力でも、健常者であれば車でかかるのとほぼ同程度の所要時間で踏破できる例が少なくない。

自動車の主要道路はほとんど川筋や谷筋にそって建設されるのに対して、点線の小道は稜線や丘陵越えの最短距離でむすばれているからである。じつは、この点線の山道・小道こそ、近世社会で地域住民が頻繁に往来していた生活の道であった …

『岐阜県の歴史』（松田之利ほか2000）

津保の地名について

モータリゼーションの進行により、川沿いの国道・県道を介した交通が当たり前となったが、昭和20～30年代までは、集落間をつなぐ山道こそが重要な生活道路であった。本号特集の舞台、長良川支流の津保川上流域（津保谷地区）も、そうした山間地のひとつである。個人的な話であるが、私にとっては郷里でもある。

現在は関市の一角をなすが、かつては、武儀郡上之保村、富之保村、中之保村、下之保村より成り立つ地域であった。このうち富之保村は、明治22（1889）年、上之保村の南半（下村）が分立したものであり、上・中・下の3ヶ村が本来の姿である。史料からは、すでに応永年間（15世紀前半）までには、津保郷が上・中・下に切り分けられていた形跡がうかがわれる（『武儀町史』1992）。

その後、富之保、中之保、下之保の3ヶ村が合併により武儀村（1955）となり、さらに武儀町へと名称を変更した（1971）。武儀町及び上之保村が関市に吸収合併されたのは、平成17（2005）年のことである。

武儀の名は記紀にも登場する国造（古代豪族ムゲツ氏）と関わる古い地名であり、現代にいたるまで連綿と受け継がれてきたが、「平成の大合併」を機に地名としての武儀は消滅した。市役所支所の名（武儀事務所）や校名（武儀小学校、武儀高校）などに名残をとどめるのみである。

一方、上之保、中之保、下之保の名は、中世以降、現在まで使われている。永禄8（1565）年の東美濃攻略後、織田信長が斎藤新五に与えた知行宛行状写のうち、『備藩国臣古証文』収録の史料には「上保・中保」の名が記されている。一方、『備藩国臣古証文』よりのちに成立した『黄薇古簡集六』収録の史料には、「上保・下保」と記されている。ふたつの写の違いが何に起因するのか不明であるが、清泰寺や日龍峯寺に伝わる史料によれば、下保すなわち下之保は、斎藤新五と佐藤方秀（鉾尾山城主）が、相給で統治し

ていた可能性がある（『美濃市史』1980、『武儀町史』1992等を参照）。そのあたりの事情が記載内容の混乱に反映されているのかも知れない。

恥ずかしながら、自身の故郷である津保が、斎藤新五の所領であったことを、地域研究部の調査に立ち会うまで知らなかった。地元では一柳城、遺跡地図では大洞城と呼びならわされている中世山城が、織豊期には津保城と呼ばれていたことについてもまったく知識がなく、現在、県道58号（関・金山線）として整備されているかつての越中西街道が、織田家の統治と深く関わっていることを知ったのも、ごく最近のことである。

幼いころから慣れ親しんだ風景、道筋、川筋が、歴史的に見てずいぶんと重要な役割を果たしていたことを知り、部員とともに史跡や街道を幾度となく訪ね歩くようになった。

本稿はその際のメモ書きをもとにした備忘録である。

歩荷道（ぼっかみち）・荷駄道（にだみち）・車道（くるまみち）

明治37（1904）年生まれの私の祖父は、大八車に荷物を積み込み、夜の明けぬうちに弁当持ちで出発し、津保川流域の富之保から長良川流域の上有知（美濃市）にいたる峠道を越えたものだと言ってくれたことがある。大正から昭和初年のことである。

納屋にあった大八の車輪は処分したが、祖父の曲げ物の弁当箱は今も手元にある。祖父からは「蓋と身の両方に飯と漬物を詰め込み、ふたつに合わせ、風呂敷にくるんだものを山仕事に持参した」「冷たい沢水で水漬けにして食うと旨かった」と聞いた。すでに百年前後、あるいはそれ以上経た代物であり、塗りもずいぶん剥げてきたが、飯を詰めるといまだに木の香りがうつる。

祖父が大八車でめざしたという上有知の町には、川湊があり、商取引の盛んな町場が形成されていた。明治中期の記録によれば、上有知湊から岐阜町の湊までは、川舟で3時間ほどかかったという。明治末年から大正にかけて、美濃町線（1911）や越美南線

（1923）が順次整備されていったので、祖父の青年時代には、舟運は衰退期を迎えていたはずである。いずれにしても当時の上有知は、木材や薪炭、和紙、繭や茶など、各地からの売り物を運ぶ人々でにぎわっていたにちがいない。

商いの道であった峠道は、同時に、嫁や婿を「やり取り」する道でもあった。墓石や系図、伝承を調べると、水系の異なる集落間で婚姻関係が結ばれたことがよくわかる。

子どもの頃、仏事や盆正月で親戚が集まると、買い物その他で出かける県道、国道沿いの町（関・岐阜など）だけでなく、普段は縁遠い谷筋の違う集落（神淵・上麻生・菅田など）の話が、頻繁に話題にのぼるのが不思議でならなかった。今から思えば、峠道を介した物流・婚姻が盛んだった頃の名残なのであろう。

谷筋の違う集落を結ぶ道ばかりではない。同じ川沿いの集落間を結ぶ生活道路も、川沿いにあるとは限らず、尾根道や峠道、すなわち山道で結ばれることが普通であった。坂や峠を徒歩で上り下りする行為は、老若男女に関わらずごく当たり前だったのである。

古い郷土史料には、こうした山道は、本来、人が荷を背負う歩荷道（ぼっかみち）か、あるいは牛馬に荷を付けた荷駄道（にだみち）であったと書かれている。

これも当たり前の話だが、人が歩く歩荷道が最も古く、拡幅に手間がかかる荷駄道は、それより後代の産物である。さらに、大八車が通う車道（くるまみち）と、その整備は明治半ば以降のことであって、新しい時代の出来事であった。以下に、荷駄道開通の事例をあげておきたい。

関市富之保と郡上市美並町を結ぶ馬越（まごえ）峠は、正徳年間（1711～1716）に、河合孫右衛門により開通されたと伝えられている（『美並村史』1981）。実際、峠道には正徳年間の銘のある石仏が安置されている。わざわざ馬越と命名されたそのわけは、それまで歩荷が主流であったことと関わるのであろう。

美濃加茂市には馬串（まぐし）峠がある。下米田と牧野の間にそびえる白山の西麓に延びる尾根筋には鞍部があり、その向こうの小丘陵は馬串山（まぐしやま）と通称されている。地域の伝承では、鞍部に開削された峠道が馬越（まごし）と命名され、それが馬串に転訛したのだという。馬越や馬串の地名からは、地域にとって荷駄道開通が画期的な出来事だったことがうかがわれる。

関市中之保の久須から久須峠を越えると、七宗町神淵の間見（まみ）に出る。この間見からは、間見峠を通じて川辺町上川辺にいたる。間見の語源は不明だが、元々、「馬見」であったとすれば、馬越に同じく荷駄道の開通と関わる地名かもしれない。

この間見峠は、木曾川と長良川、異なる水系を繋ぐ重要なルートのひとつであった。関ヶ原の戦い後、上有知の商業振興を図った金森長近は、関町の商権を奪うため、間見峠と氷坂を封鎖したという（前掲『美濃市史』）。どの程度の実効性があったかは不明だが、金森統治期に上有知繁栄の基礎が築かれたことは間違いないし、ふたつの峠道の封鎖により、飛騨川方面と上有知との人や物資の往来は、いよいよ盛んになったと思われる。

話を元に戻す。荷駄道・車道が開かれたことにより、物資の流通はより盛んになったと思われるが、明治を迎えても、歩荷に頼らざるを得ない山間地があったこともまた事実である。

『上之保村誌』（1938）には、明治期、最奥の鳥屋市村の小学校長が、村の子どもたちに人力車を見せたいとの思いで、峠道を担ぎで運ばせた話が収録されている。また『金山町誌』（1975）には、馬も嫌がるほどの難所のあった長洞峠（菅田・金山間）で、荷駄を馬から降ろし、代わって人が担いだとの話が収録されている。

峠に車道が整備されるのが明治半ばであったということは、前近代の山道は、おおむね歩荷道か荷駄道であったということである。富加町加治田の造り酒屋、松井屋酒造で聞いた話だが、その昔は、樽に詰めた酒を下呂まで荷駄に付けて運んだそうである。

山みちを歩き、考える

天正11（1578）年、越中制圧を命ぜられた斎藤新五は、濃尾の兵を率いて上杉軍を打ち破ったという（月岡野の戦い、『信長公記』）。加治田城や津保城を出発した新五率いる軍勢は、当然、歩荷道・荷駄道を通して飛騨を抜け越中入りを果たしたのであろう。気の遠くなるような話である。

峠越えを追体験してみたいと思い立った我々は、2023年11月、郡上高校の先生方、生徒の皆さんを誘い、長良川沿いの美濃市上河和と津保川沿いの関市富之保を結ぶ峠道を歩いた（右写真）。



上河和側の登り道はよく残っていたが、富之保側への下り道は、相次ぐ風水害のせいかすでに廃道と化していた。写真の通り、上河和からの道には街道の風情も残っていた

が、富之保への降り道の荒れ様はひどいもので、部員からの評判も散々だった。

『富之保村誌』（1925）等、古い地誌によれば、富之保と長良川方面を結ぶ峠道は、上河和と富之保を結ぶ道以外にあとふたつあると書かれているが、すでにふたつの道ともに滅失したと思われる。

一方、津保谷区域と飛騨川方面とを結ぶ峠道は不思議と残りがよい。南から順に並べると、以下のように、舗装された峠道が今も複数通じているのである。

- A 下之保轡野から美濃加茂市廿屋へ（廿屋峠）
- B 中之保久須から七宗町神湊間見へ（久須峠）
- C 中之保温井から七宗町神湊上中切（もしくは大塚）へ（北条坂）
- D 上之保小和田から七宗町神湊杉洞へ（杉洞峠）
- E 上之保本郷から金山町袋坂へ（少合峠）
- F 上之保上会津から金山町戸川へ（放生峠）

これに対し、長良川方面に向かう舗装道路は以下の通りである。

- A 上之保竹之腰から八幡町小那比・美並町苅安へ（大峠）
- B 富之保武儀倉から美並町大矢へ（馬越峠）
- C 下之保殿村から美濃市上有知へ（見坂峠）

津保川をはさんだ東西で、なぜこのような違いが生じているのか。

上河和から富之保まで歩いたように、あちこちの峠道を歩いてみたいのだが、すでにその多くが廃道と化しているようである。さらには獣害の危険もある。

しばらくは古い郷土史料の記載や古地図、写真を引き比べながら、聞き取り調査を続けていこうと考えている。

後 記

『岐阜県立関高等学校地域研究部報告 第10号』は、「飛騨川と津保川を結ぶ ～織田政権と運材・行軍のみち～」の特集である。

津保川水運及び津保街道を利用した陸運の研究は、2023年度の新入部員が、インターネット検索中に偶然みつけた「勝興寺文書」（勝興寺宛浅井長政書状）の記載内容が端緒となった。本号の島田氏の寄稿文にもある通り、彼らの研究成果が、この地域の中世史研究の新たな展開の一助となったことは間違いないと考える。

本号は、そんな彼ら研究活動の総括であり、すでに時期を逸しているが「卒業記念号」でもある。

（１）「戦国・織豊期における飛騨川流域の製材と運材」は、その集大成ともいえる論考である。この論考により、織田政権が津保川流域の地を重視した意義を明らかにし得たと考える。本稿は、2024年度「地歴甲子園・歴史フォーラム」において、優秀賞を受賞している。

（２）「東美濃三カ所城をめぐって ～山城と古文書から考える中濃の戦国史～」は、津保川流域の歴史を考察した一連の論考の第一弾である。第9号（2024）に掲載済みであるが、本特集の口火を切った活動の成果として再掲載することにした。本稿にまとめた成果は、2024年度全国高等学校総合文化祭郷土研究部門において、最優秀賞を受賞した。

（３）「船野城と津保・郡上の抗争 ～天正二年秋、郡上郡沓部をめぐって何が起きたか～」は、現地踏査と文献調査を繰り返すなかで得られた見解をまとめものである。天正二年の船野城の戦いに関しては、郡上藩家伝に記載があるのみであるが、他の史料と比較検討することにより、郷土史の中で、さらには隣接地域を含む広域の中世史の中で、この出来事を位置付けることができたのではないかと考える。本稿は、2025年度「地歴甲子園・歴史フォーラム」において、優秀賞を受賞している。

（４）「郷土史でまちづくりにチャレンジ！～歴史マンガと足軽デリバリーで未来につなぐ～」は、コツコツと積み上げた学びの成果を、地域あるいは広域に広めていこうとの試みをまとめたものである。富加町と連携した歴史マンガの刊行事業や、パフォーマンスを加えた史跡案内等の活動実践は、2025年度全国高等学校社会科学・郷土研究発表大会公共・政策部門において、最優秀賞を受賞している。

（５）「関高校地域研究部との共同研究活動を振り返って」は、2019年7月以来、地域研究部の活動に関わっていただいている島田崇正さん（富加町郷土資料館館長）の寄稿文である。7年にわたる戦国時代研究及び外部における様々なイベントに、ほとんどお付き合いいただいている。文中、本校の地域連携の様子が生き生きと描かれている。

（６）卒業生5名のうち、森翔吾さん、岩原知哉さん、渡辺俊太さんからの寄稿文である。彼らのメンターともいえる島田さんの文章と合わせてお読みいただきたい。

末尾に付した拙稿、「津保川流域の山道についての備忘録」は、遺跡踏査や文献調査の際のメモ書きをまとめたものである。

（文責 林 直樹）

岐阜県立関高等学校地域研究部報告

第 10 号

発 行：令和 8 年 8 月 25 日

発行所：岐阜県立関高等学校

岐阜県関市桜ヶ丘 2-1-1

電話 0575-22-5688

FAX 0575-23-7089

岐阜県立関高等学校地域研究部